

K-546

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第50集

我妻館跡

発掘調査報告書

1995

米沢市教育委員会

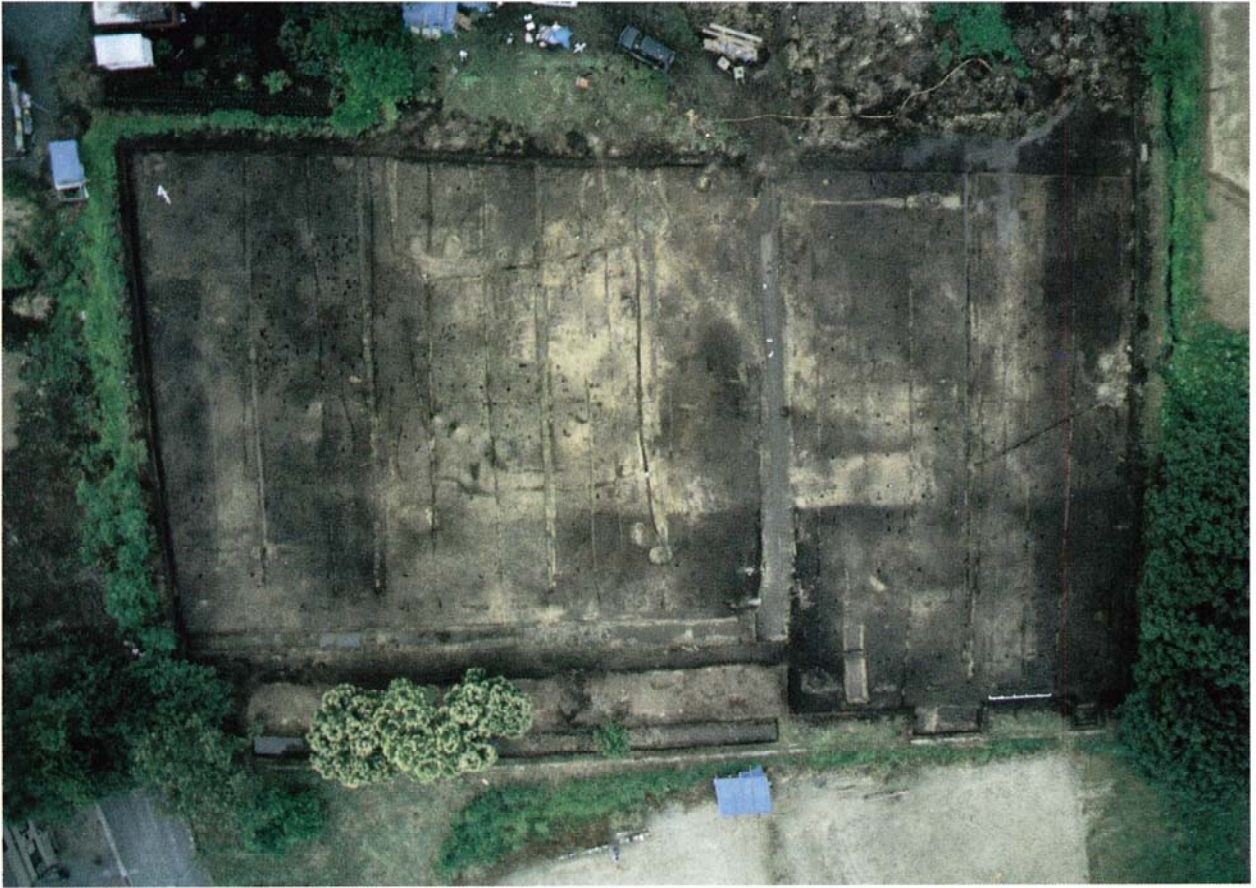
米沢市埋蔵文化財調査報告書 第50集

我妻館跡

発掘調査報告書

1995

米沢市教育委員会



▲ 遺跡全景



▲ 土塁全景

序 文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成6年度に実施した、宅地造成に伴う我妻館跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

本市には山城、平城を含め220箇所の中世城館跡を確認しております。城館跡の調査は6遺跡を数えますが、城館跡の本格的な発掘調査を実施したのは初めてであります。

本館跡は、昭和60年の分布調査によって確認されたもので、複郭式の平城跡として注目されている所であります。館跡一帯は本市でも遺跡が多く分布している所であり、付近には堂森山館、原田館、金谷館が存在し、中世の館跡が集中している所でもあります。

今回の調査は、宅地造成計画の範囲に限定して調査を実施したもので、本館跡の約三分の一の範囲に相当します。

調査によって本館跡は、長方形プランを有する複郭式の平城で、中心に主郭、左右に副郭を配した特異な形態を呈しており、平城の成立と発展を知る上で注目される館跡であります。

近年の開発事業の進展に伴い、地下に埋もれた埋蔵文化財とのかかわりも増加傾向にあります。市民の経済と福祉の向上を目的とする諸開発事業と、市民ひいては国民の文化遺産である埋蔵文化財については、状況に応じた対処が望まれているところであります。

本市民憲章では「教養を高め文化のまちをつくりましょう」と地域文化の環境づくりという立場から、これらの間の調整を図りながら今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって数多くのご指導、ご協力を賜りました文化庁、山形県教育庁文化財課をはじめ、日新ホーム(株)、地権者各位、地元の皆様に対し、感謝申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の保護普及の一助となれば幸いです。

平成7年3月

米沢市教育委員会

教育長 相 田 實

例 言

- 1 本報告書は、米沢市教育委員会が平成6年度に実施した、宅地造成に係る「我妻館跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は米沢市教育委員会が実施したものである。
- 3 遺跡の所在地は、米沢市万世町堂森字野中である。
- 4 調査体制は下記の通りである。
調査主体 米沢市教育委員会
調査総括 舟山豊弘（文化課長）
調査担当 手塚 孝
調査主任 月山隆弘
調査参加者 井上吉栄・石井よそ子・伊藤龍嘉・岩野敏雄・菊地芳子・
工藤智恵子・黒沢栄美子・黒沢富男・斎藤道夫・佐藤弘則・
高橋 実・富樫福次・中島国雄・前山慶一・柳町昌孝
事務局 我妻淳一
調査指導 文化庁・山形県教育庁文化財課
調査協力 日新ホーム㈱・我妻チエ子・我妻文彦
- 5 本報告書の作成は、月山隆弘が担当し、全体については、手塚 孝が総括した。
- 6 昆虫遺体の鑑定については、本市の昆虫研究家草刈広一氏から特別寄稿を賜った。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。
B Y—掘立建物跡、T Y—柱穴、D Y—土塙、D N—井戸跡、P Y—ピット、
X Y—不明遺構を示している。
- 2 挿図等の縮尺は、各挿図にスケールで示した。
- 3 出土遺物については、米沢市教育委員会が保管している。

本文目次

I	遺跡の概要	1
II	調査の経過	3
III	検出遺構	
	(中世の遺構) 1) 建物跡、2) 土壇、3) 土塁、4) 堀・溝跡	4
	(近世の遺構) 1) 土壇 2) 井戸跡、3) 溝跡	18
	(近代の遺構)	21
IV	出土遺物	
	(中世の遺構) 1) 土鍋、2) 木製品	21
	(近世・近代の遺物) 1) 陶磁器、2) 木製品、3) 木製品、4) 昆虫遺体	23
V	総括	
	1) 我妻館跡の遺構	33
	2) 出土遺物	34
	3) 我妻館の成立と年代	34
	4) 我妻館の歴史的な背景	37
	特別寄稿	
	我妻館跡から出土した昆虫遺体	31
	我妻館跡出土の昆虫遺体写真	32
	(表紙題字は米沢市教育長 相田 實による)	

挿図目次

第1図	我妻館跡位置図	2
第2図	B Y 1 掘立建物跡	5
第3図	B Y 2 掘立建物跡	6
第4図	B Y 3 掘立建物跡	7
第5図	B Y 1～3 掘立建物跡柱穴土層断面図	8
第6図	B Y 4 掘立建物跡	10
第7図	B Y 5 掘立建物跡	11
第8図	B Y 6 掘立建物跡	12
第9図	B Y 7 掘立建物跡	13

第10図	B Y 4 ~ 7 掘立建物跡柱穴土層断面図	13
第11図	D N13井戸跡、D Y14・28・29土壌平面・断面図	16
第12図	土塁版築断面・K Y22堀跡断面図	17
第13図	K Y11溝跡・12堀跡・K Y35溝跡断面図	19
第14図	我妻館跡出土土鍋実測図(1)	25
第15図	我妻館跡出土土鍋・陶磁器実測図(2)	26
第16図	我妻館跡出土遺物実測図(3)	27
第17図	我妻館跡出土遺物実測図(4)	28
第18図	我妻館跡出土木製品実測図(5)	29
第19図	我妻館跡出土柱根実測図(6)	30
第20図	我妻館跡周辺の中世城館縄張図	36
第21図	我妻館跡建物跡配置図	40
付図1	我妻館跡遺構全体図	
第1表	平城編年表	37

図 版 目 次

巻頭図版 遺構全景・土塁全景

図版1	遺跡遠景・遺跡近景	図版8	出土遺物（土鍋）
図版2	検出遺構（掘立建物跡）	図版9	出土遺物（土鍋・陶磁器）
図版3	検出遺構（柱穴・井戸跡・土壌）	図版10	出土遺物（陶磁器）
図版4	検出遺構（土塁・土壌・堀跡）	図版11	出土遺物（染付陶磁器）
図版5	検出遺構（堀跡・竹管暗渠）	図版12	出土遺物（陶器）
図版6	検出遺構（堀・溝跡、土塁土層断面）	図版13	出土遺物（木製品）
図版7	遺構全景	図版14	出土遺物（柱根）

I 遺跡の概要

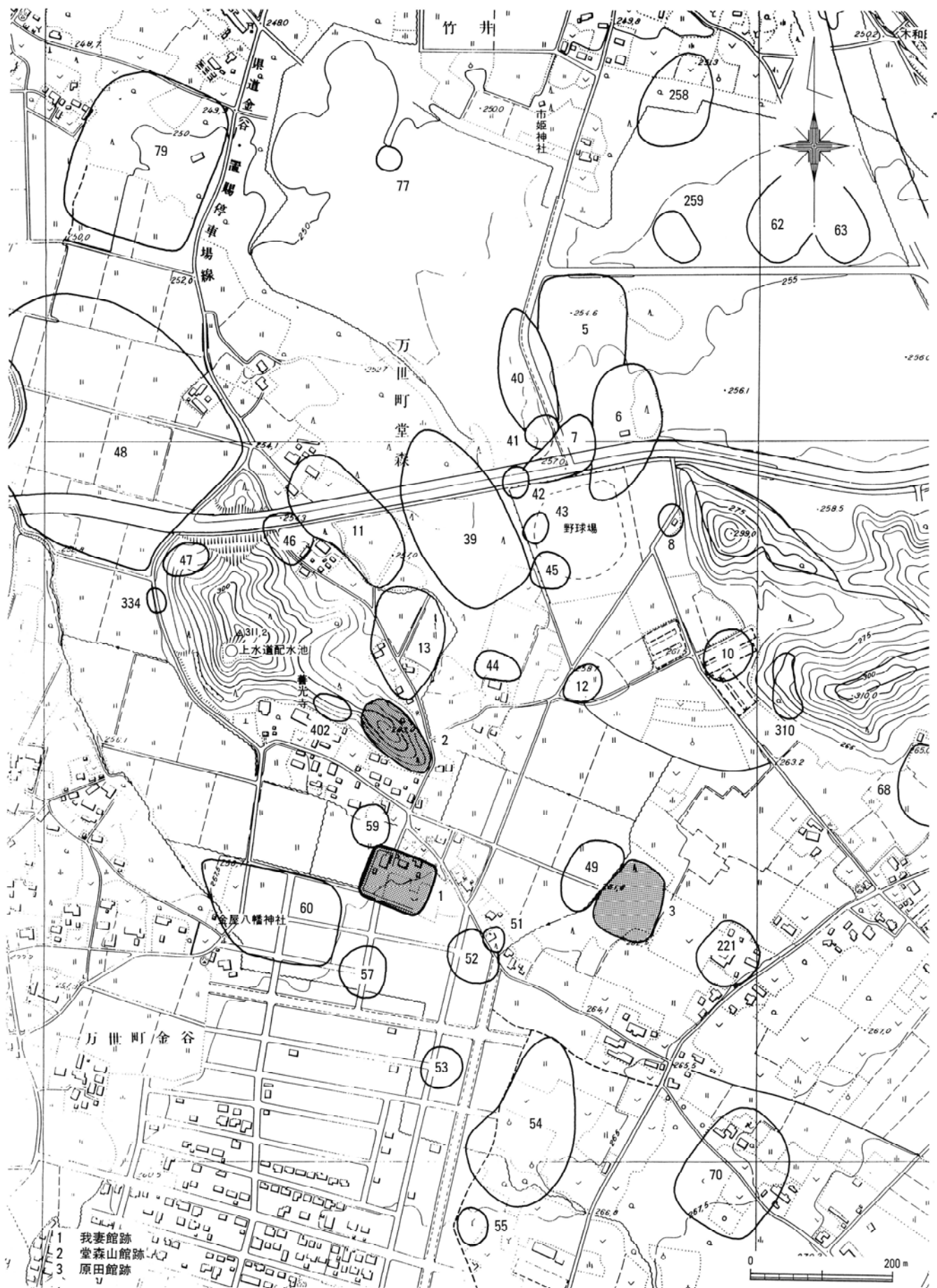
この我妻館跡一帯（万世地区）は、標高265m梓川流域の末端部にあたり、湧水にも恵まれ、米沢市内では八幡原遺跡群と称し、遺跡の宝庫として注目されている。米沢最古の縄文集落となる大清水・柿の木・二夕俣A遺跡や方形周溝墓が検出された八幡堂遺跡、それに中世の遺跡も集中し、原田館跡・堂森山館・金谷館等の中世城館跡や比丘尼平遺跡、比丘尼平廃寺、堂森山塚等の宗教遺跡も数多く分布している。

本市には、山城、平城等を含め中世城館跡が220箇所が確認されており、置賜地方はもちろん県内でも最多を数える。特に、県内最古と推定される11世紀の平城となる木和田館跡をはじめ、置賜最古の山城である万世館山城はその代表となる。

本館跡は、米沢市街地北東約4km、標高311.2mの独立丘陵である堂森山の南東約100mに位置するもので、八幡原工業団地南西側の米沢市万世町堂森字野中地内に所在する。館跡の現況は宅地、水田、畑地、市道になっており、館跡付近は、工業団地の造成に伴って開発が進み、雇用促進住宅や桑山団地等の宅地開発、また、県立高等学校等が建設中で急速に変貌している地域でもある。本遺跡の存在は、昭和60年の分布調査において確認されたもので、その大半が我妻氏の宅地内に存在することから我妻館と命名している。

主軸方向をほぼ東西に示した長径115m、短径の南北長が85mを有し、平面形が長方形を呈する館跡であり、旧我妻家の宅地及び田畑を囲むように、土塁と堀が配置されている。その大部分は、市道や田畑の耕作によって破壊されているが、南側と西側の一部に土塁と水堀が良好に残存している。館跡の全体形状は、土塁の外側と内側に堀を廻らし、その内部に東西側に2本の堀で区画した複郭式の館跡で、中心に主郭、左右に複郭を配した特異な形態を呈しており、中世の城館の成立を考える上でも貴重な遺跡として注目されてきた。

本市では、城館跡に関する発掘調査は、本遺跡以外では昭和58年に実施した木和田館跡等今日まで6遺跡を数えるが、本格的な発掘調査は、平成3年の米沢城東二の丸跡（現米沢城史苑）以来であり、空白の中世史を埋めるには至っておらず、今回の調査は意義深いものであった。今後も開発等との調整を図りながら、館山城など山城の本格的な発掘調査を実施することによって中世史がより明確になることであろう。



第1図 我妻館跡位置図

II 調査の経過

本館跡の調査は、平成6年度に我妻館跡付近一帯が分譲地として宅地造成の計画に入ることから、平成5年度に開発業者と協議を重ねた。

平成5年度に開発業者から試掘調査の依頼を受けた本市教育委員会は、昨年度の平成5年10月に重機を用いて幅4m、長さ70m、30mの2本のトレンチをそれぞれ配し試掘調査を実施した。

その結果、開発予定地の中で南側部分に当たる約5,000m²の範囲に柱跡・堀跡・溝跡等の遺構が確認されたため、関係機関と協議の上、7月以降に宅地造成工事の着手予定であることから、平成6年度4月から緊急発掘調査を実施するに至った。

今回の調査は、調査対象となる5,000m²のうち、柱跡・溝跡等の遺構残存が最も良好になっている、本館跡範囲の南東部分の約三分の一に相当する範囲の約3,000m²を調査対象と設定した。

調査は、平成6年4月18日から開始した。当日は器材の運搬及び発掘調査の成果と無事故を祈念し鍬入式を開催した。同日から残存する土塁と堀の以外は重機で表土剝離と土砂運搬を実施し4月21日に終了した。4月20日から調査区の西側から順次面整理を始めたが、場所によっては重機による掘り下げが足りなかったこともあって、人力によるスコップでも掘り下げを行い25日に終了した。この面整理によって柱穴、溝跡等の大かたの遺構群が、調査区中央部北半部に集中することが判った。

5月に入り、連休は現場作業を休みとし、5月9日から再び遺構確認の面精査を進め、5月16日からは並行して土塁の表土剝離の面整理と外堀と内堀の掘り下げを開始した。5月31日には、面精査と同時に掘立建物跡の柱穴・土壇・溝跡群や、土塁と堀跡等の遺構の確認をほぼ終了した。引き続いて、6月1日から土壇・柱穴等の遺構群の掘り下げを開始した。6月7日から遺構の掘り下げと並行して、平板測量（20分の1）による平面図とセクション図等の記録作業を実施し、適宜遺構や出土遺物の写真撮影も行った。

堀跡からは昆虫遺体等も検出したため、昆虫の専門家に出土地点等の詳細のデータを話し、昆虫の鑑定を依頼した。

6月28日に調査区全体の空中写真撮影、6月30日には地権者、地元住民を対象として現地説明会を開催し、7月15日に器材を撤去し現地調査を終了した。

III 検出遺構

今回の調査で確認された遺構は、出土した遺物と遺構の切り合い状況から次の三時期に大別される。第一に中世の館跡に伴うもので、土塁・堀跡・溝跡をはじめとし、掘立建物跡7棟・土塋等がある。第二に、旧我妻家等に関する江戸時期の遺構群で、流し場状遺構をはじめ、土塋十数基・溝状遺構8基・井戸跡1基等がある。第三には、明治以降から現代にかけての遺構であり、ゴミ捨て穴・暗渠跡・ホップの支柱痕等が検出されている。この第三の遺構全体図の表現は、一段細い一本線で記している。

ここでは、確認された中世の遺構群を中心に、付図以外で挿図に記したものについて簡単にその概要を述べる。

中世の遺構

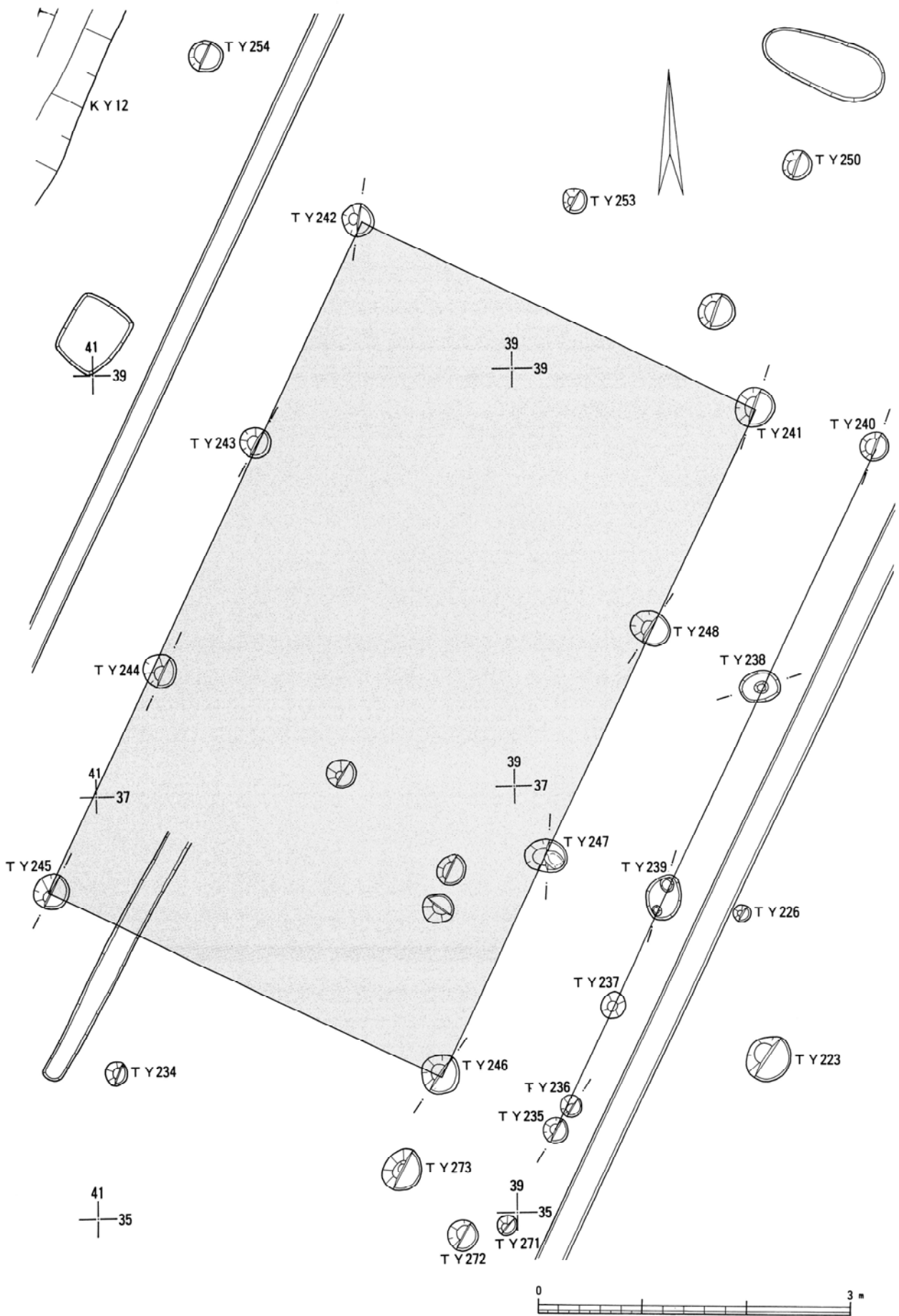
1) 建物跡

B Y 1 掘立建物跡『第2図 図版2』

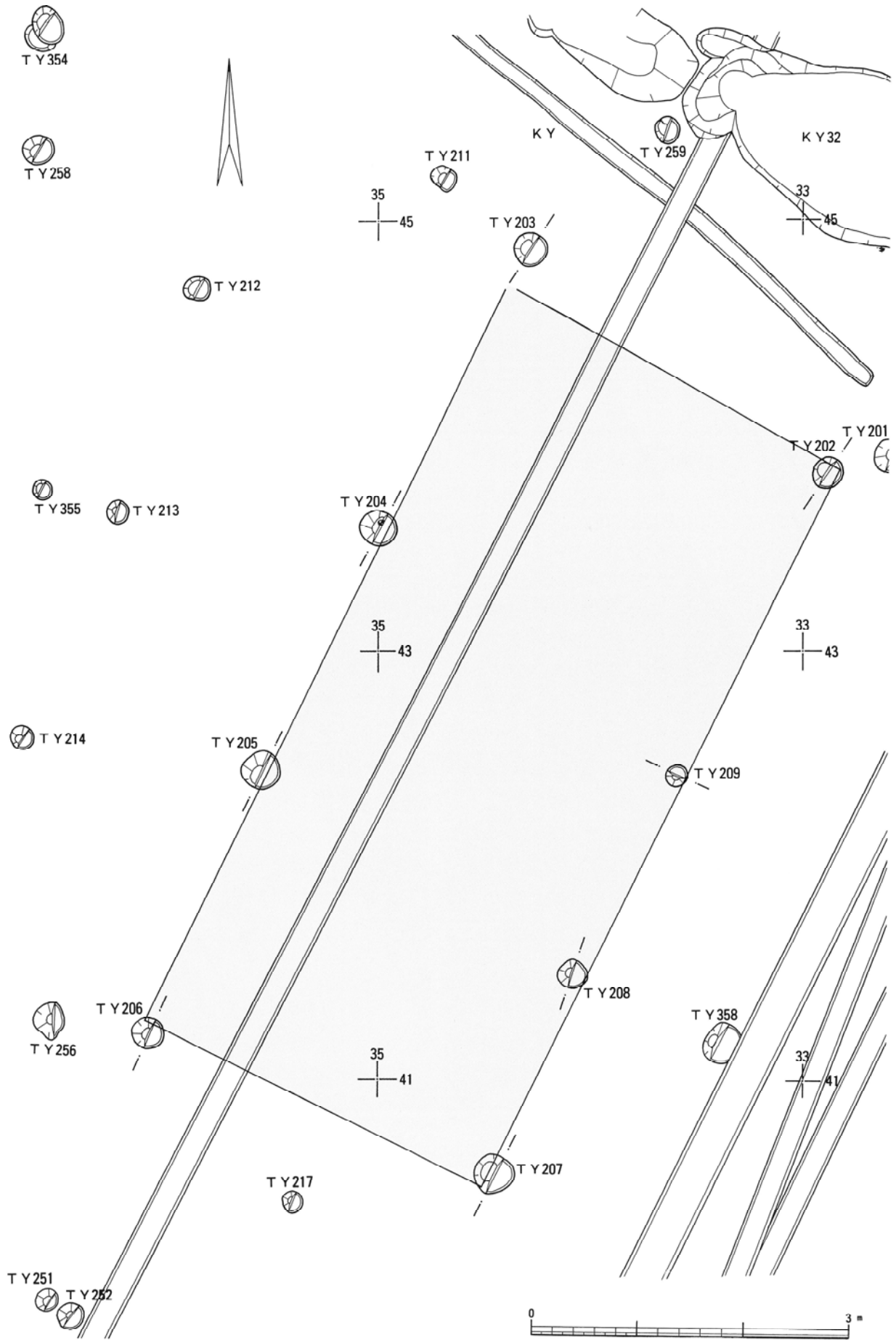
調査区の南東側、42-36-40-36 Gに確認されたもので、東側に廂を有する建物跡で、桁行南北3間（西側間尺2.30×2.35×2.38m）・（東側間尺2.35×2.40×2.25m）、梁行は東西に1間（北側間尺4.18・南側間尺4.08m）、廂間（間尺2.43×2.37×2.43m）の規模である。桁行と廂間は1.2mの間隔があり、廂の南端にはT Y 235・236柱穴の2基が確認され、他の柱穴より小さい。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し、掘り方24~45cm、深さ18~39cmを測る。埋土は1~2層で確認され、T Y 238柱穴は約12cmの柱痕跡を有している。T Y 247柱穴内には20cm前後の平坦な河原石が確認された。桁行の主軸方向はN-27°-Eを示す。

B Y 2 掘立建物跡『第3図 図版2』

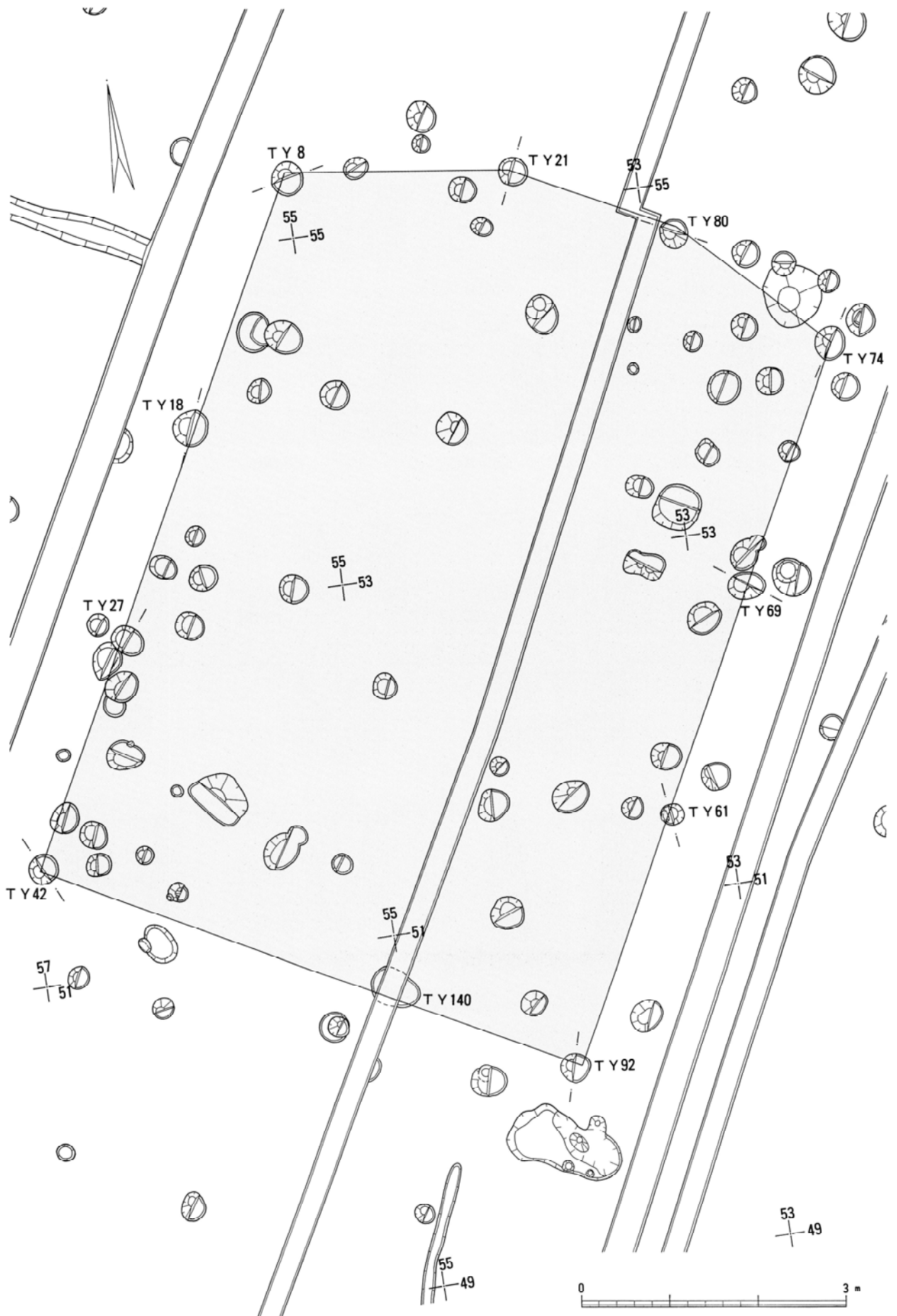
調査区北東側、37-33-45-41 GのB Y 1 北側に確認されたもので、桁行南北3間（西側間尺2.95×2.57×2.65m）・（東側間尺3.15×2.15×2.0m）、梁行は東西1間（北側間尺3.45・南側間尺3.43m）の規模である。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、掘り方20~38cm、深さ14~29cmを測る。埋土は1~2層で確認された。T Y 203・207には約20cmの柱痕跡を有している。桁行の主軸方向はN-27°-Eを示す。



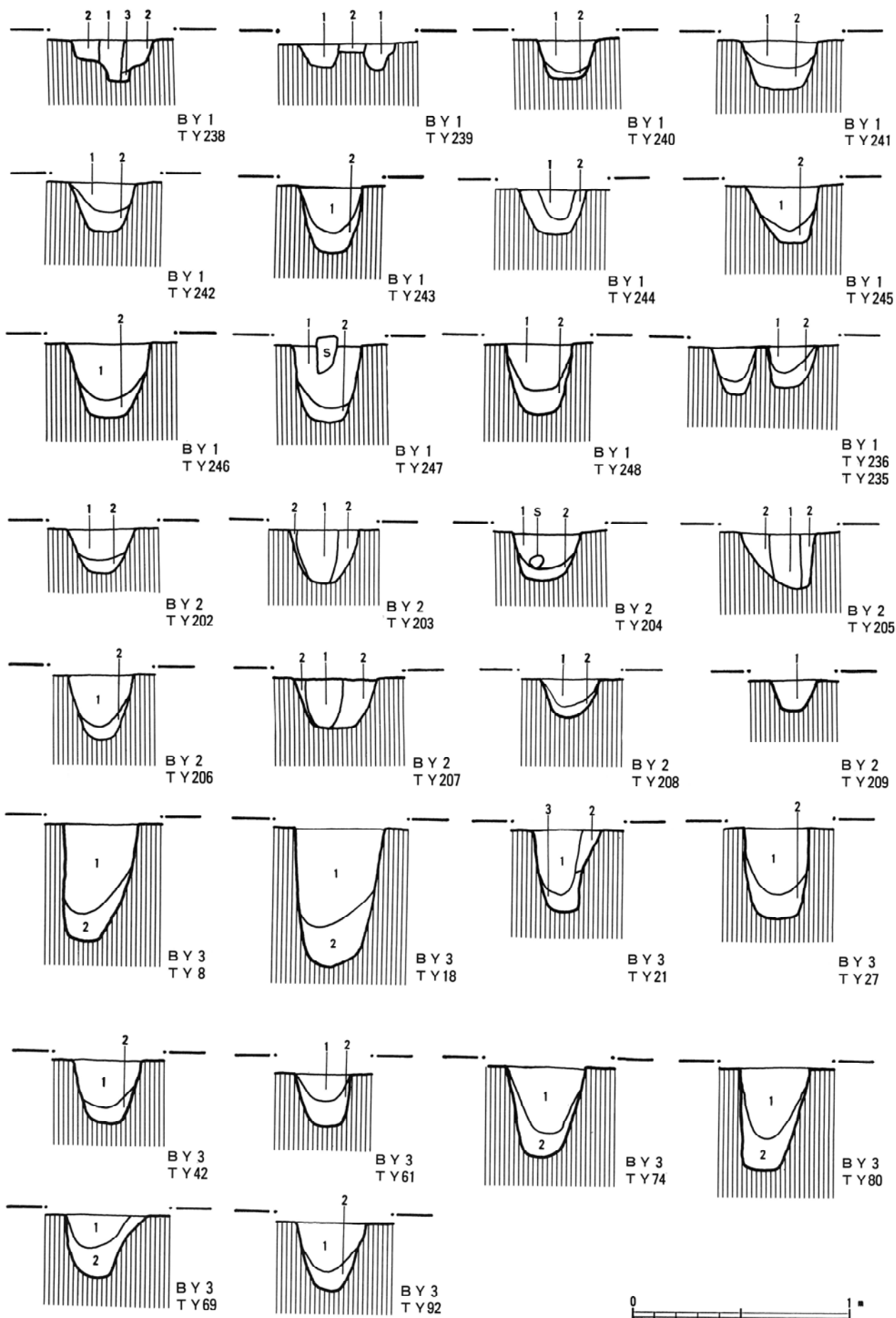
第2図 BY1 掘立建物跡



第3図 BY2掘立建物跡



第4図 BY3掘立建物跡



第5图 BY 1~3掘立建物跡柱穴土层断面图

B Y 3 掘立建物跡『第4図 図版2』

調査区西側、57～51—56～50 Gに確認されたものであり、B Y 4・7と重複する。桁行南北3間（西側間尺3.10×2.83×2.83m）・（東側間尺2.95×2.70×3.10m）梁行東西は北梁行の中間の2本の柱跡が北側（外側）に75cmに張り出して3間になっており、（北側間尺2.55×2.00×2.15m）、南梁行（2）間（間尺4.10×2.40m）の規模である。柱穴の平面形は、ほぼ円形・楕円形を呈し、堀り方25～43cm、深さ24～64cmを測り、深さにばらつきがある。埋土は2～3層で確認された。T Y 8・21・80には約20cmの柱痕跡を有している。遺物の出土は認められない。桁行の主軸方向はN—27°—Eを示す。

B Y 4 掘立建物跡『第6図 図版2』

調査区西側、57～51—56～52 Gに確認されたものでB Y 3・7と重複する。桁行南北3間（西側間尺3.30×2.30×2.47m）・（東側間尺0.80×2.20×2.50m）の規模である。梁行東西は北・南側ともに不明である。柱穴の平面形は、ほぼ円形・不正楕円形を呈し、堀り方30～70cm、深さ35～70cmを測りまちまちである。埋土は全て2層で、T Y 75には約20cmの柱痕跡を有し、底部には偏平な20cm大の礫が確認されているが他の遺物は認められない。桁行の主軸方向はN—25°—Eを示す。

B Y 5 掘立建物跡『第7図 図版2』

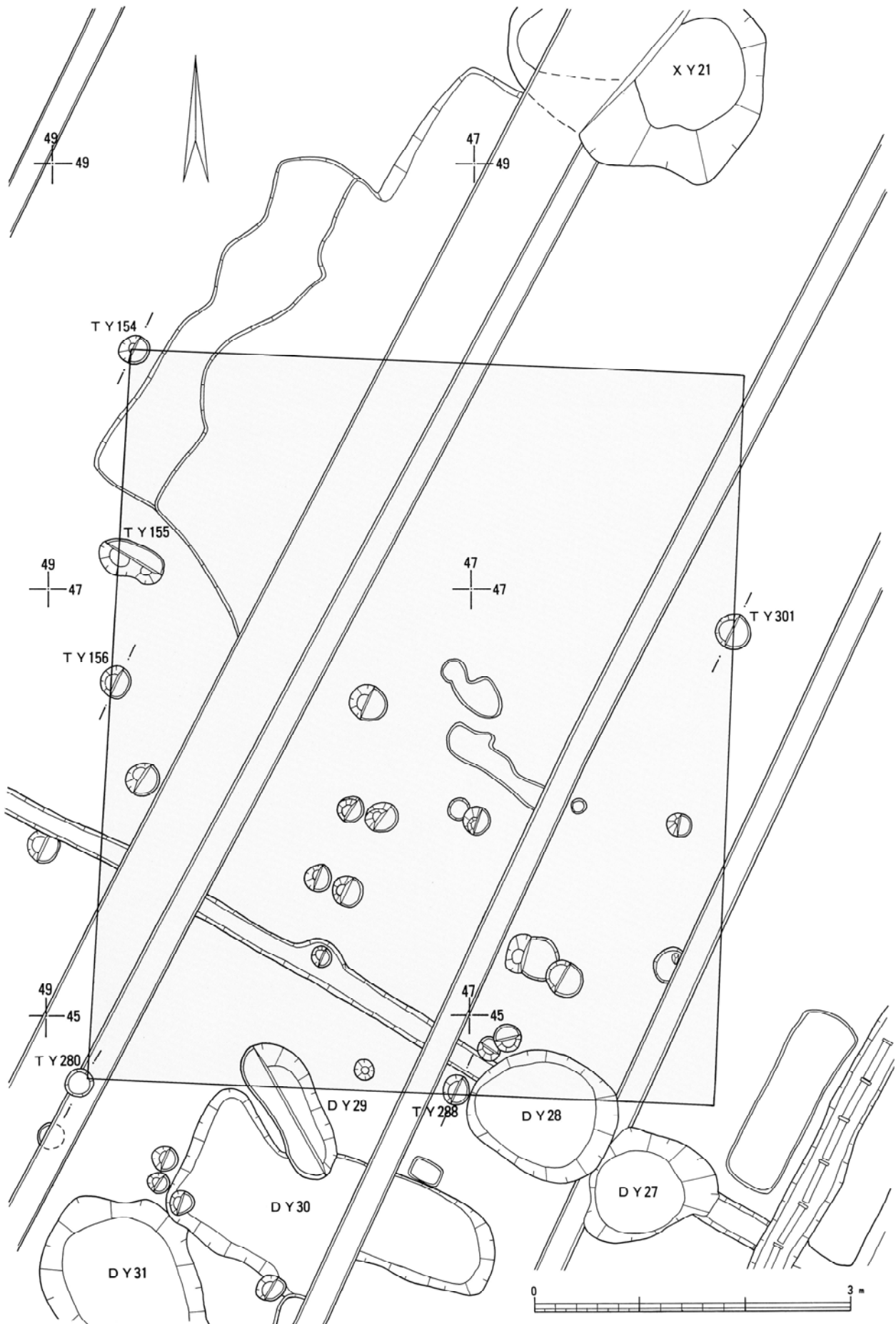
調査区ほぼ中央、49～45—48～45 Gに確認されたもので、D Y 23・29等と重複する。桁行南北（2）間（西側間尺3.17×3.78m）・東側は1基のみの確認であり不明。梁行東西（2）間（南側間尺3.55m）の規模であり、北側は西側1基のみの確認であり間尺は不明である。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、堀り方24～34cm、深さ21～31cmを測る。埋土は2層で、遺物の出土は認められない。桁行の主軸方向はN—0°—Eを示し真北である。

B Y 6 掘立建物跡『第8図 図版2』

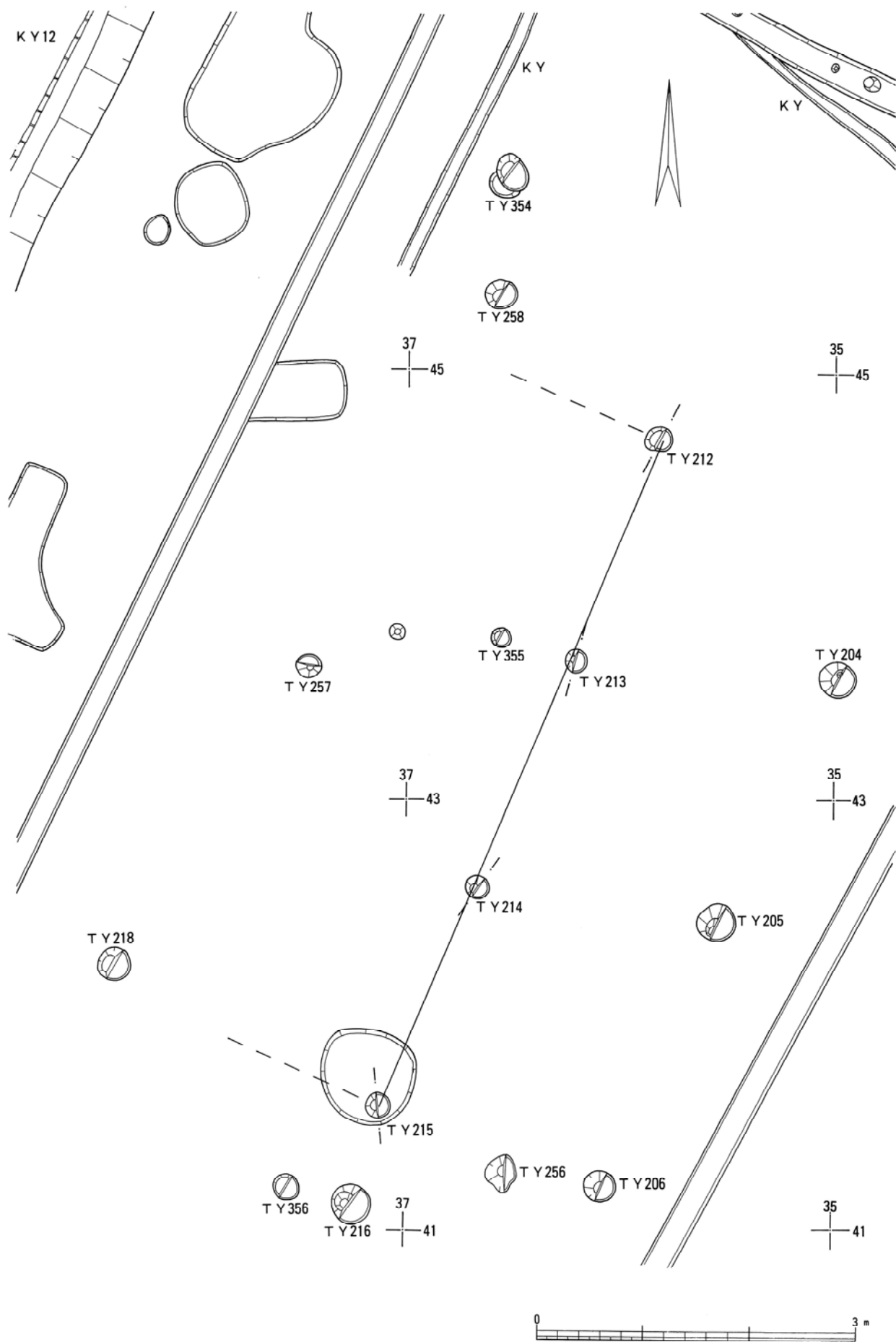
調査区東側、38～36—45～42 G、K Y 12東側に確認された、桁行（南北3間）の南北4基のみの確認であるが、B Y 1・2の傾きとほぼ同様であることと、この周辺には最近まで建物が立っていたことから攪乱が著しいが、西側には建物が構成しているものと判断し、あえて建物跡とした。確認された柱穴は（桁



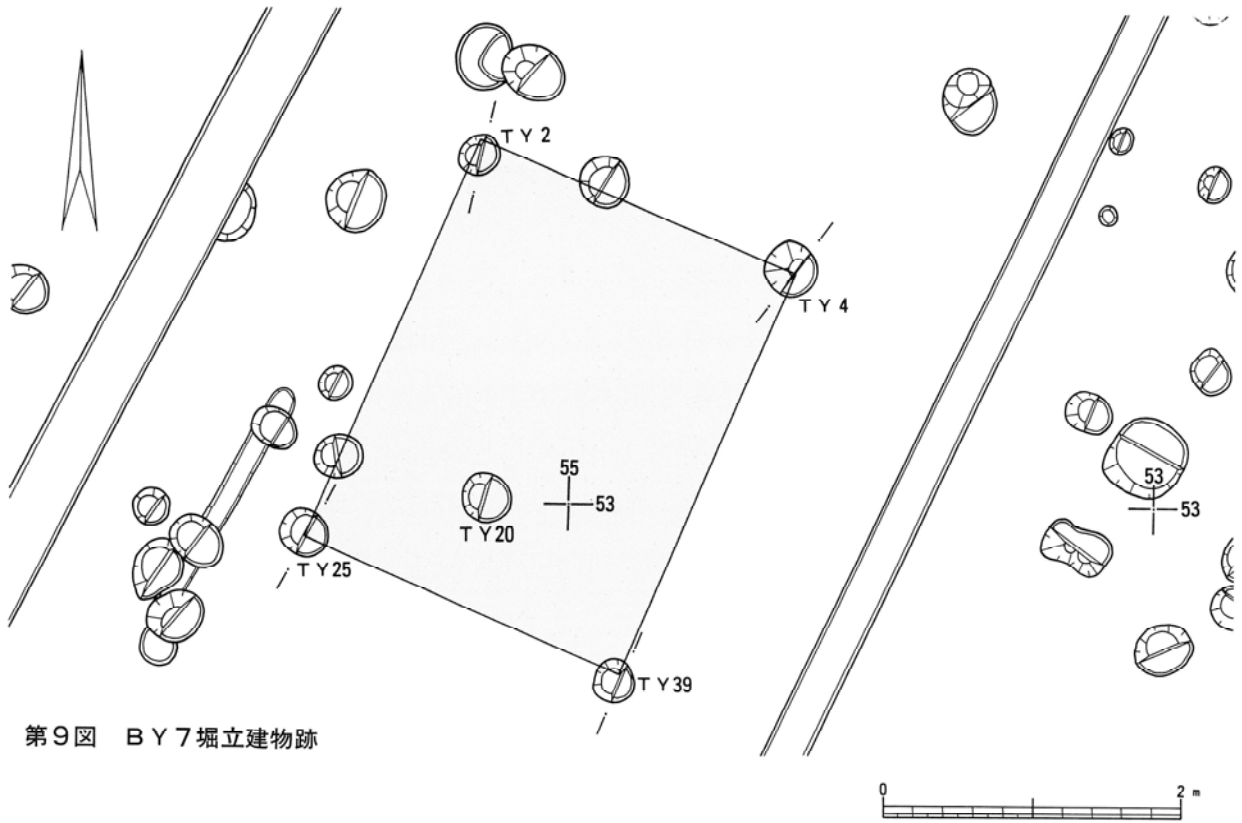
第6図 BY4掘立建物跡



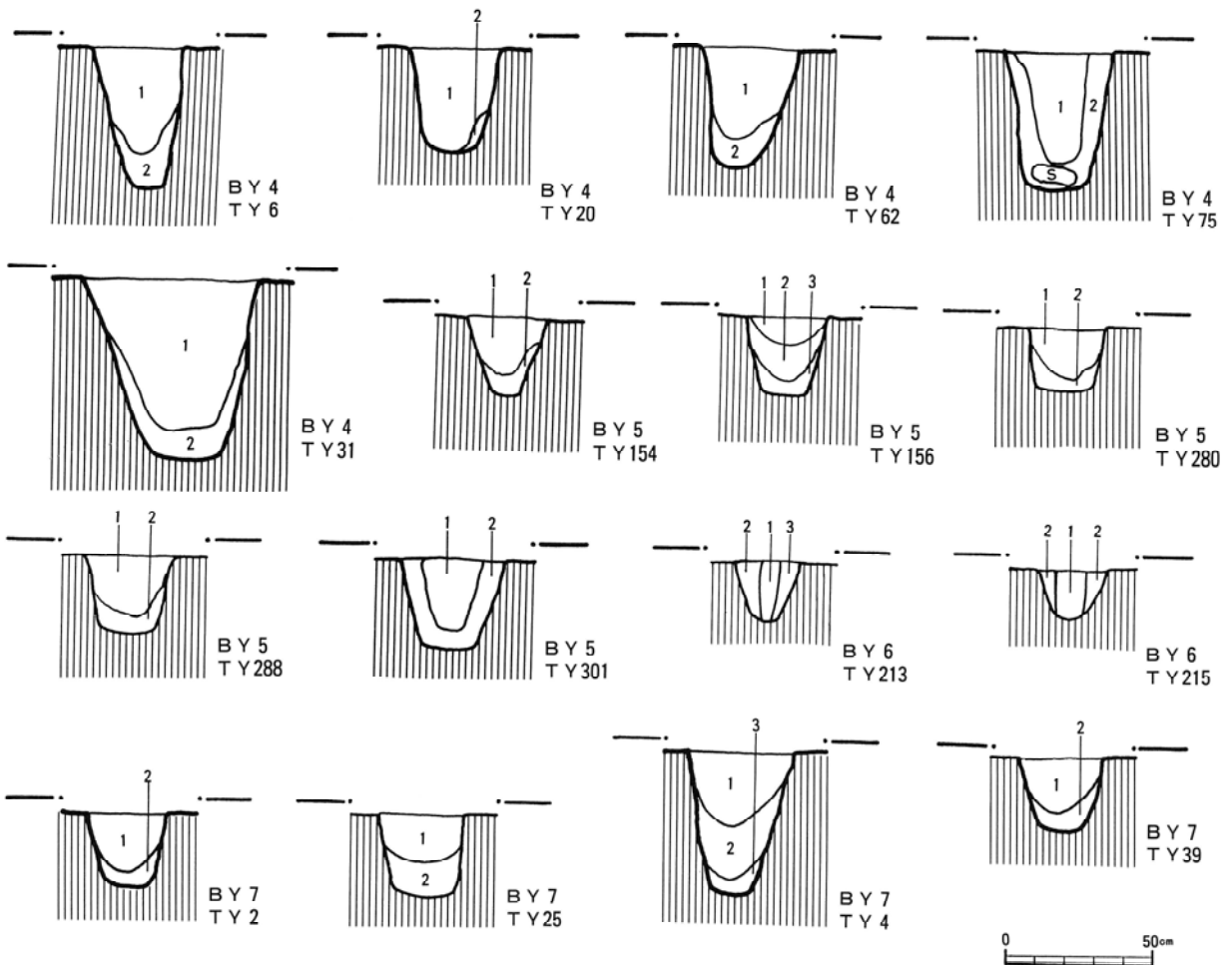
第7図 BY5堀立建物跡



第8図 BY6堀立建物跡



第9图 BY7掘立建物跡



第10图 BY4~7掘立建物跡柱穴土層断面图

行間尺2.18×2.33×2.22m)の規模である。柱穴の平面形は、円形を呈し、堀り方20～25cm、深さ17～21cmを測る小規模な柱穴である。覆土は1～3層になっており、遺物の出土は認められない。桁行の主軸方向はN-22°-Eを示す。

B Y 7 掘立建物跡『第9図 図版2』

調査区西側、57-38-57-54 Gに確認されたもので、B Y 3の中にあり4とともに重複する。桁行南北1間(西側間尺2.80m)・(東側間尺3.50m)、梁行東西(北側間尺2.32m)・(南側間尺2.35m)と今回の調査で一番小規模な建物跡である。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈し、堀り方27～37cm、深さ25～48cmとまちまちである。埋土は2～3層で、遺物の出土は認められない。桁行の主軸方向はN-23°-Eを示す。

2) 土 壙

今回確認された中世期に属するとみられる土壙は、出土遺物と切り合い状況からD Y 14・D Y 364の2基である。その概要を簡単に述べる。

D Y 14土壙『第12図 図版3』

57-38-57-54 Gの調査区北側に確認されたもので、K Y 11溝跡北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、径1.44～1.66m、深さ29cmを測る。覆土は自然堆積状況を示し、3層に分けられる。遺物は最下層からは土鍋の口縁部片(第14図4)・(第15図21)が出土している。

D Y 364土壙

44・43-51-50 Gに確認されたもので、D Y 14と同様K Y 11溝跡北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、径0.90～1m、深さ1.24mを測る。覆土は人為的な埋土であり、8層に分けられる。遺物は最下層から土鍋の口縁部片、中程から不明木製品等が出土している。

3) 井戸跡

D N 13井戸跡『第12図 図版3』

57-38-57-54 G、K Y 11溝跡北側に重複して確認されたものである。平面形は不正楕円形を呈し、径1.10～1.24m、深さ56cmを測る。覆土は自然堆積状

況であり、覆土は7層に分けられる。遺物の出土は認められない。

4) 土塁『第12・13図 図版4・6』

付図に見られるように、本館跡は主軸方向をほぼ東西方向に呈した、長径115m、短径南北85m、の長方形の館跡で、外周する外堀と内堀に囲まれた空間に構成している土塁である。

土塁は、外堀と内堀の空間に囲まれて配置されているもので、現況は館跡の南側と西側の一部にその面影を残すのみであるが、土塁の確認長、長さ80m、幅2.8~4.0m、高さ約1.5mを測る。しかし、土塁を版築している高さは、土層断面の観察から約1mである。構築当時の状況を検討すれば、高さは2m前後を有していたものと推定される。

この土塁は、外堀と内堀の堀込んだ土砂を版築したと判断するのが妥当であろう。土層の版築は2~4層確認されているが、版築している土層からは、遺物の出土は認められなかった。また、土塁内には立木が生い茂っていることもあって、土塁上に柱穴を含む建物跡などのピットは確認されなかった。

5) 堀・溝跡

K Y12内堀跡『第13図』

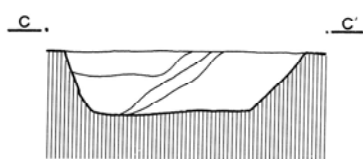
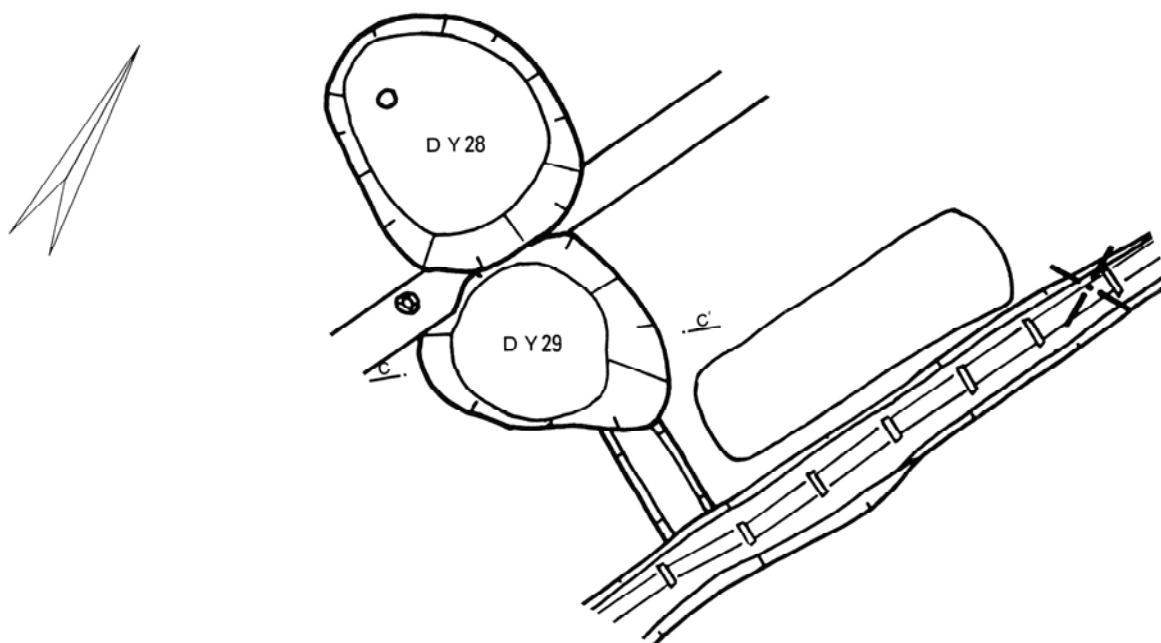
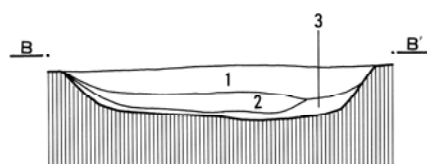
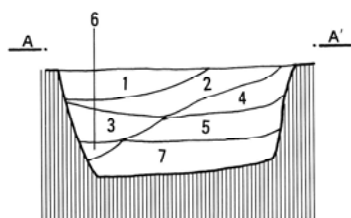
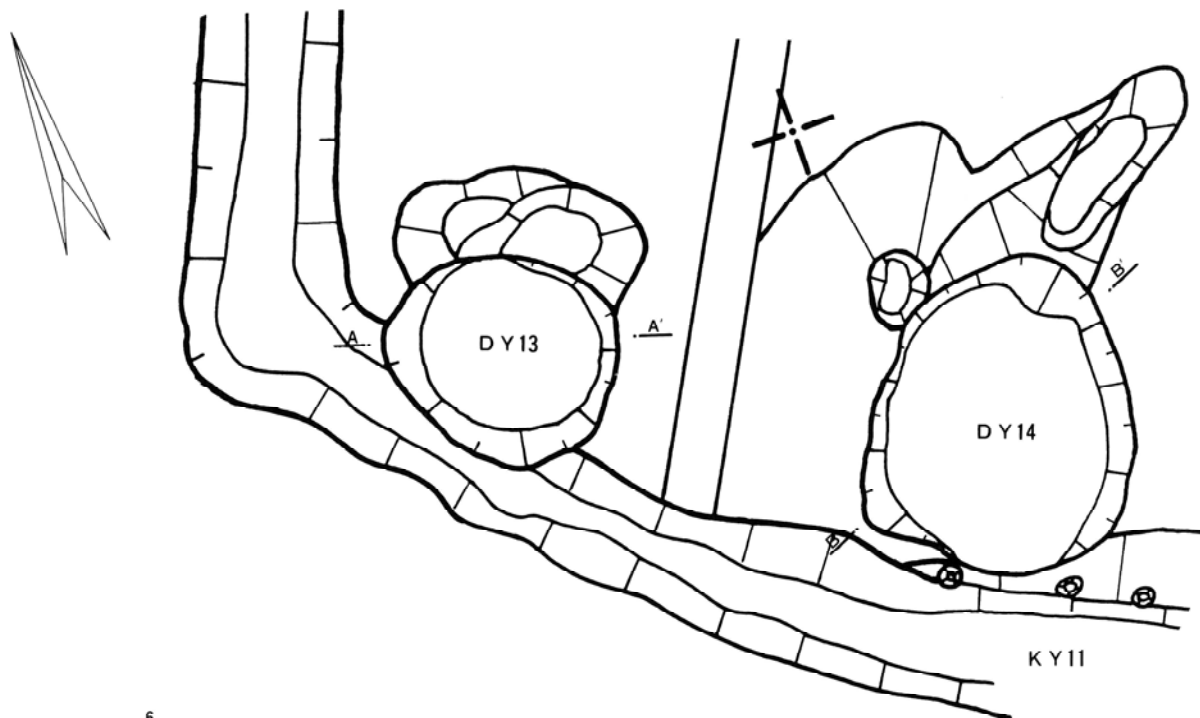
付図に見られるように本館跡は、館跡を長方形に外周するとみられるK Y22外堀跡とK Y12内堀跡が調査区南側と中央部でそれぞれ確認された。

K Y12内堀跡は、東複郭の東側では認められなかったことから、土塁の内側を全周しているものではなく、西複郭側及び主郭と両複郭を区画しているものである。西複郭の南西側及び主複と西複郭では北側に直角に曲がるコーナー部を確認している。西複郭側は土塁の内側を全周するものと判断される。

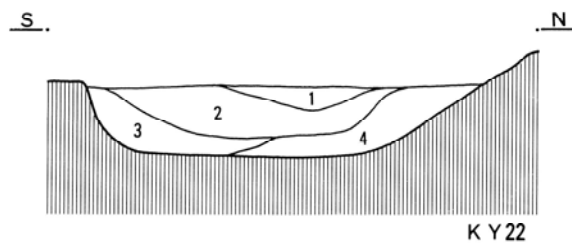
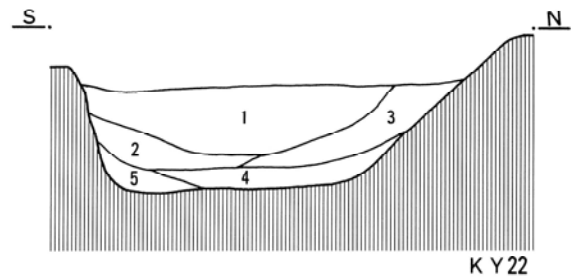
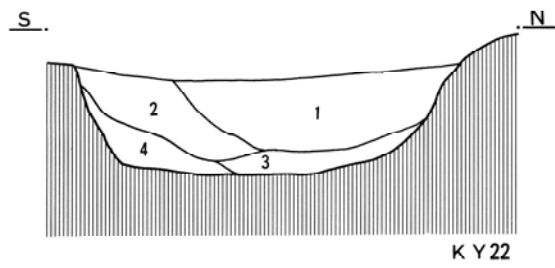
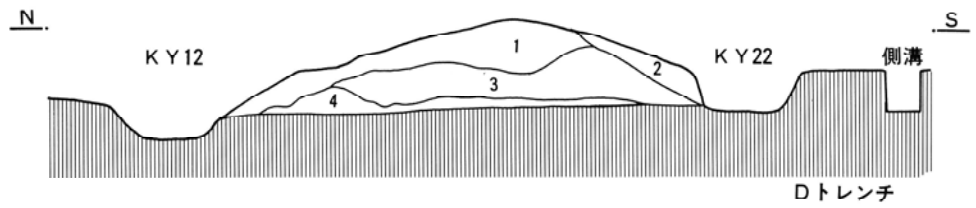
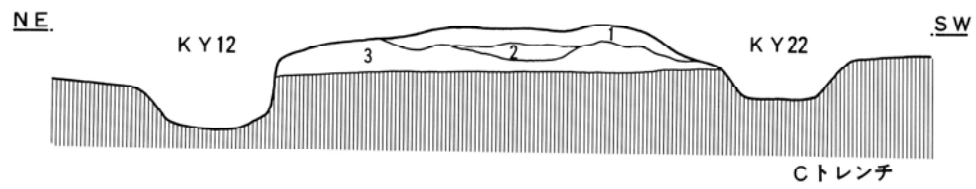
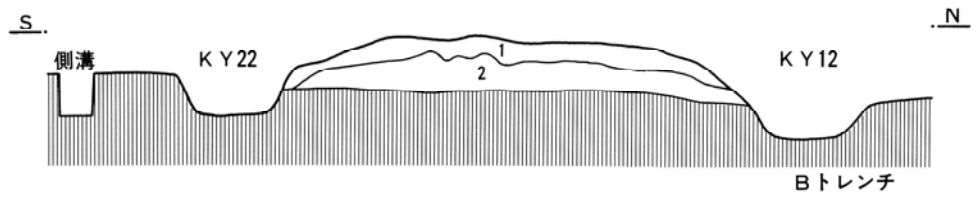
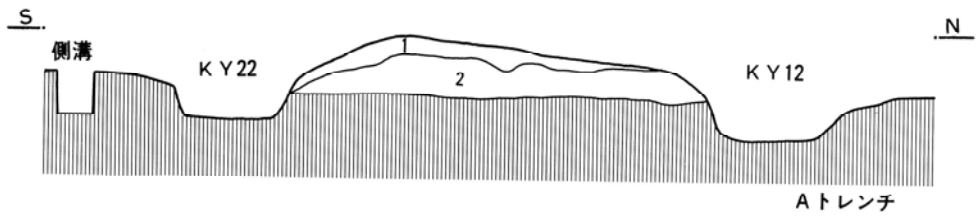
また、外堀と内堀に囲まれた館跡内部を東西側に堀（南北）で区画する堀跡K Y22は南北方向の中央部付近で立ち上がり、一旦途切れることが確認されており、東側から主郭に通じる出入口にあたるものと判断される。

内堀の内部にはある程度の間隔をおいて、堀底部の一部が高まっている部分が3箇所認められており、この工法は障子堀跡と判断している。

この障子堀は、関東地方に多く見られる手法で、北条氏の代表する工法と考えられていたが、全国各地に同様な遺構が確認されていることから、一応に限定することは疑問視されている。また、外堀跡にも東側と中央部の2箇所と同



第11图 DN13井戸跡・DY14・28・29土壌平面・断面図



第12図 土壘版築断面・KY22掘跡断面図

様な痕跡が認められている。

K Y12内堀跡の検出された規模、長さ120m、幅2～3m、深さ50～80cmを測る。堀の断面形は、土塁側（東西方向）ではV字状になっており、底面の幅が狭いのに対して、主郭の東側（南北方向）ではた底面の幅が広く平坦である。この構成は防備を考慮したものと推定される。覆土は自然堆積状況であり、覆土は6～8層に分けられる。

K Y12からの出土遺物の主なものとして、土鍋（第14図5・6、第15図7）、陶磁器（第15図9・10・18・19、第16図24・26・27・30、第17図33・38・39）、木製品・椀（第18図40～45）などがある。また主郭と東複郭の箇所から南北方向配した、後世に埋設された竹製の暗渠跡が確認されている。

K Y22外堀跡『第12図』

外堀跡は、調査区南側の土塁南側に東西方向にほぼ一直線に確認された。堀の外側部分（南側）の立ち上りは調査区外のため確認できない部分もあるが、外堀跡跡の検出された規模は、長さ95m、幅約2m、深さ50～70cmを測る。

堀の断面形は、南側が垂直に近い立ち上るのに対し、土塁側は南側より緩やかである。底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積状況であり、覆土は4層に分けられる。

K Y22内堀跡からの出土遺物の主なものとして、陶磁器（第15図22）などがあるが出土遺物はK Y12と比較して少なく、近世の陶磁器などが数点のみである。

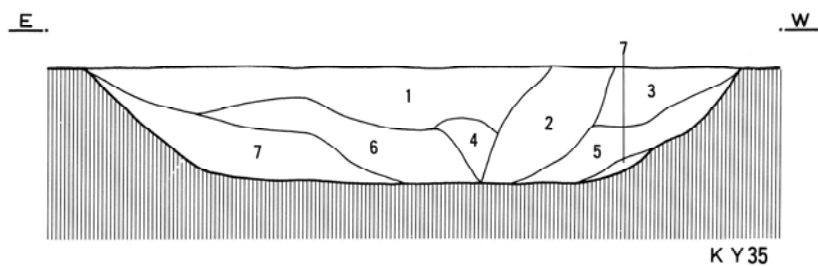
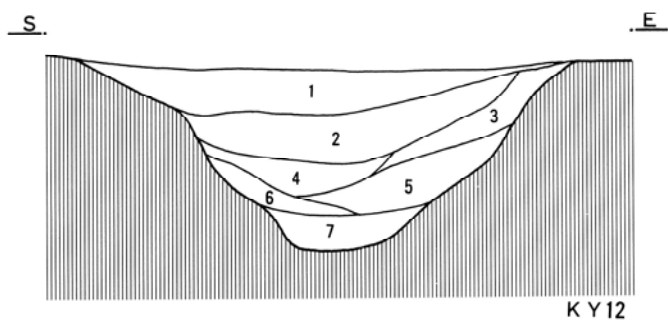
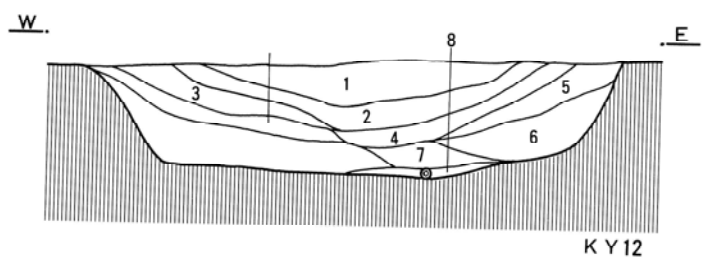
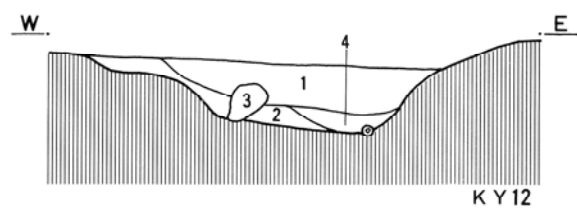
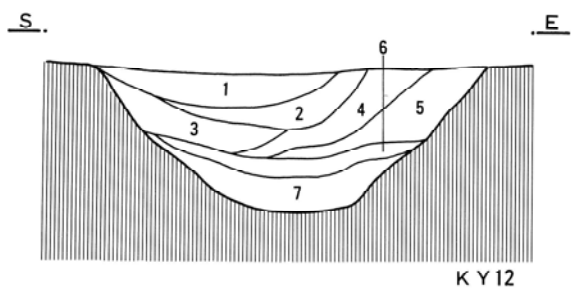
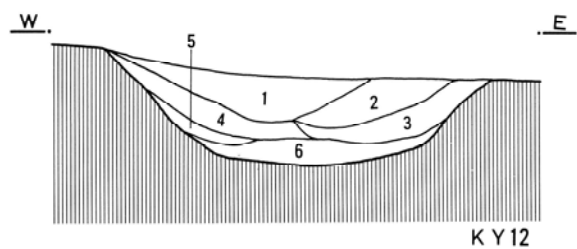
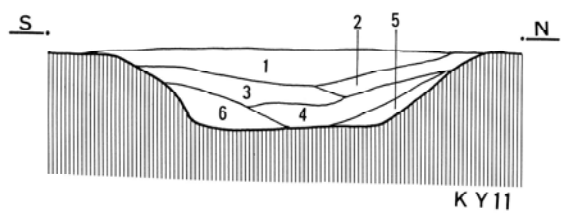
近世の遺構

近世の遺構には、流し場状遺構1基・土壇14基・溝跡・建物を構成できない柱穴・ピットなど多数ある。特に土壇は楕円形及び不正円形を呈しており、底部に河原石を設置しているのを特徴としている。

1) 土壇

D Y24土壇

57—57 G、調査区北側中央部南側にK Y12溝跡南側に重複して確認されたものである。平面形は隅丸方形を呈し、径1.10～1.24m、深さ56cmを測る。覆土は自然堆積状況であり、覆土は7層に分けられる。出土遺物は陶磁器などが数点である。



第13图 KY11沟迹·12堀迹、KY35沟迹断面图

D Y25土壙

57—54 G、調査区ほぼ中央の南北方向に延びる K Y12溝跡南側に重複して確認されたものである。K Y11溝跡北側に重複して確認されたものである。平面形は隅丸方形を呈し、径1.10～1.24m、深さ36cmを測る。覆土は自然堆積状況であった。覆土は3層に分けられる。出土遺物は棒状の木製品1点がある。

2) 溝 跡

K Y11流し場状遺構

調査区北側中央部に確認されており、D N13・D Y14などと重複している。方形に配された溝と小規模な池状の遺構からなるものである。平面形は、東西方向と南北側のコの字状にほぼ直角に曲がって確認されている。東側が西側より浅く、北側から南側へ、そして東側から西側へと外周していた流し場状遺構もしくは洗い場的な遺構と推測される。南側の西側コーナー部付近は、溝跡の幅が約6mにわたって広がっており、溝跡の北・南側には一つの段を有する部分があることから、この部分が洗い場と判断される。またこの洗い場付近の溝跡内上部の北・南側にはには、不規則で規模の小さい柱穴が十数基確認されることから、この流し場状遺構には覆いが建っていたものと推定される。規模は東西方向の一辺が21m、幅1～2m、深さ80cm前後を測る。

同様な遺構は本館跡よりも規模が大きいものの、上浅川A・大浦C遺跡などからも検出されている。

出土遺物は、土鍋（第14図1～3）、陶磁器（第15図20、第16図30、第17図35）の碗・皿・小鉢・片口などがある。

K Y32溝跡

調査区北東側に確認された、東西方向に延びているもので、溝と小規模な土壙状の遺構からなるもので、東側はB Y2北側で途切れる。

この溝跡の出土遺物には、陶磁器（第16図23・25・31・32）の染付け皿などが多い。

K Y35溝跡

調査区南側に確認された、南北方向に延びているもので、北側はB Y南側で途切れる。上幅1.90m、下幅1m深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

近代の遺構

前述したように、明治以降から現代にかけての遺構であり、ゴミ捨て穴・暗渠跡・ホップの支柱痕などが検出されている。付図中では、竹管以外は線を一段細く記している。

この中で注目される遺構として暗渠には2種類確認されており、土管暗渠が1列と竹管暗渠が2箇所確認された。竹管暗渠の一方は南北方向に延びるKY12内部の東側に重複して確認されたものである。竹管の接続には杉の皮を用いており、竹管を二三重巻きにして、その上を麻縄で縛る工法をとっている。もう一方は調査区東側に東西方向に延びて確認された。工法は前者と同様である。竹管暗渠は土管暗渠施設以前のものとして農業史を知る上で貴重なものである。

IV 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土鍋・陶磁器（茶碗・皿・小鉢・片口）、木製品では（椀・曲げ物・呪符・柱根）、昆虫遺体などがあり整理箱で8箱分に相当する。これらの遺物の大半は、近世末期から明治と明治初期にかけての陶磁器類が占めており、中世期に属する遺物は僅かである。ここでは、挿図に示した中世の遺物を中心に簡単に述べる。

中世の遺物

1) 土鍋『第12図1～6 図版8・第13図7～8 図版8』

本館跡に伴うKY12堀跡・KY11溝跡・DY14土壙・TY柱穴内から酸化焙焼成を有する土器が41点出土している。この土器はすべて小破片で内耳取手土鍋である。本市では現在までに、大浦C・木和田館・上浅川・館ノ内B・大樽遺跡など20遺跡から出土しており、特に大浦CⅢ次調査からは復元可能な8個体分の内耳取手土鍋が出土している。

この内耳取手土鍋は3単位の内耳を基本とし、器高が低く、胴部は直ないし幾分外反し、ふたたび頸部から口縁部付近で大きく外反する。また底面が平坦を呈する特徴がある。

3単位の内耳取手は、口唇部から口縁部と胴部の接点付近にかけて接続している。内耳は口縁部の、三分の一均等に配置しているものではなく、2個所を接近させ1箇所の内耳を対比させた2：1を基本としている。調整は、内部は

ど磨滅が著しく不明のものもあるが、内面調整を主体として、横位のへラナデを施している。外面の一部にへラナデが認められるものもあり、口縁部付近には煤が多量に付着している。これらの土鍋は微細な特徴から下記の2類に区別された。

・ a類 『第14図5・6・8』

口唇部が斜平縁を呈し、口縁部付近に隣接しており、内耳取手部がやや太い形態を有している。

5・6は内耳取手部分のみの出土である。8は口縁部から胴部の接点付近の出土で、7よりやや口径が小さく31cmを測る。器高、底径は不明であるが15cm前後を測るものと推定される。4の外面にへラナデが認められる。大浦C遺跡などから出土している。

・ b類 『第14図1～3・4・7』

器形は内反り気味に立ち上がり、直立系である。口唇部が平縁で、やや丸みを帯びている。

1～3・4は内耳取手部分のみの出土である。7は口縁部付近の出土で、口径は34cmを測る。器高、底径は不明であるが8同様である。内耳取手部は認められない。

この器形の土鍋は置賜地方に多く出土していることから、地方色の濃い土器群と考えられる。この出土した土鍋の年代は概ね15世紀前半から15世紀後半頃と推定される。

2) 木製品

中世に属すると推定される木製品はすべてK Y 12堀跡からの出土である。

木札『第18図42・43』

42・43は墨痕の跡は認められなかったが呪符木札と推定される。木札42は長さ12.6cm、幅6.6cm、厚さ7.0cmを測り、中心からに穿孔が施されている。44は長さ13cm、幅3.0cm、厚さ6.0cmを測る。片方に穿孔があり、角の面取を施している。両木札ともに穿孔を施していることから、鴨居や柱などに打ちつけて使用したたものと推定される。

近世・近代の遺物

近世及び近代の遺物は土壌・堀跡・溝跡からの出土で、陶磁器・木製品・石製品・金属製品などがあり、そのほとんどが日常に使用されたと判断される陶磁器類である。以下、出土した主な遺物について述べる。

1) 陶磁器

・染付碗『第15図10～12』

9の胎土は薄い灰色を呈し、貫乳が入る相馬焼である。10・11・12の胎土は薄い灰色を呈し、コバルト発色も灰色がかっている。器厚は厚く、10・11は外面に二重の網目文様、12には外面に縦方向の鎖状の文様が描かれている。すべて古伊万里であり江戸時代前半（17世紀）と推定される。

・平碗『第15図14・15』

14は緑釉平碗である。陶土に少量の陶石が混入しており、釉はややガラス質を帯びた緑釉色を施しており細かい貫乳が入る。14・15ともに器厚が薄く、体部に綾をもつ相馬焼と判断される。19は内面の一部に判断不能な染付がある。外面体部にロクロ整形時の隆起線が認められ、外部下部は露体であり、内部下部には重ね焼痕跡が認められる。26・27は底部片であり、26は19同様外部下部は露体であり、双方の内部下部には重ね焼痕跡が認められる。28の胎土は灰褐色を呈し、少粒の陶石が混入している。底部片であり、内面にはあやめの染付が施されている会津本郷焼である。

・染付皿『第15図16～18 第16図23～25・31・32』

16は染付皿底部片である。胎土は白色を呈し、呉須はやや濃い青を使用している。内面の染付絵は帆かけ舟以外は不明である。

23～25・28・29・31・32の胎土は白色を呈し、呉須は濃い青色を使用している。器厚が薄く、外部から口唇部を押圧している。23の染付は内部中央に亀が描かれている。25の染付は内部中央に館・上部に雁、左右にそれぞれ帆かけ舟・針葉樹が描かれている。

24は二分の一の出土であるが25同様の染付と推定される。31・32も25同様な器形と呉須を用いており、染付の内部には松島風の景観が描かれている。中央に館、上部に雁と雲、左右にそれぞれ帆かけ舟・松が数本描かれている。

29の胎土は灰白色を呈し、呉須は青灰色で、内面中央部と周囲に染付がみら

れ二本ライン以外判断できない。外面下部に薄い三本の横ラインが入る。

20は茶碗で胎土は薄茶色を呈し、口唇部が丸みを呈している。22は相馬焼の秣茶碗である。黄褐色を呈し、内外面に細かな貫乳が入る。少粒の陶石が混入している。外面体部に緑釉色の染付けが認められるが、ほんの僅かであるため染付絵は不明である。

・かき釉鉢『第17図33』

胎土は白色を呈し、呉須は濃い青を使用している。染付は内部底面にはあやめ、体部には格子状と網目状の間に牡丹が描かれている。外面体部にはV字状のラインで区画する間に交互にわらび状（花）と菱形を形どった文様が施されている。

2) 木製品

漆器碗『第18図40・41』

K Y12から出土の木碗で、40は平碗で器厚が厚く、底部から体部にかけて横に外反し、口縁部にかけて垂直に立つ。口径11.3cm、器高4.7cmを測る。底部外面には「小」の字が朱によって細線で書きこまれている。41は底部から体部にかけて緩やかに外反し、40と比べ器厚が薄い。口縁部と底部が欠損している。

曲物『第18図44・45』

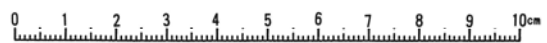
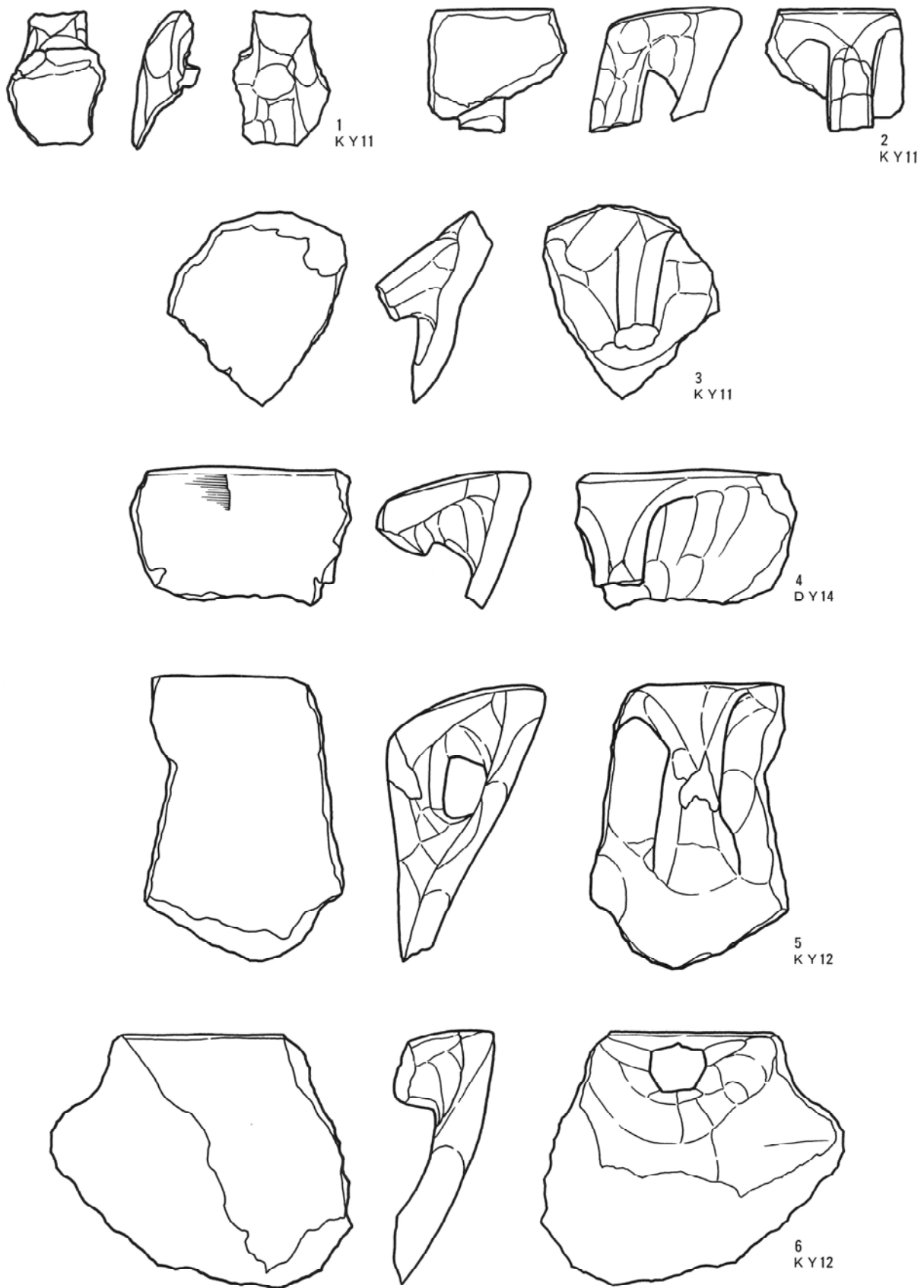
K Y12から出土した曲物の底部である。44は約5分の1の出土であるが、直径50cm以上を呈するものである。45は3個対に別れているが直径21cmを測る。

柱根『第19図46～53』

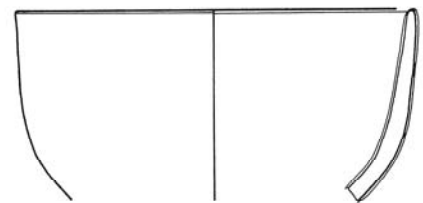
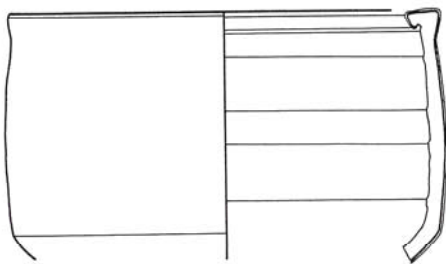
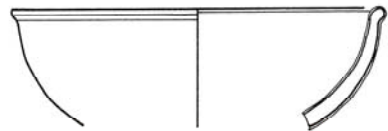
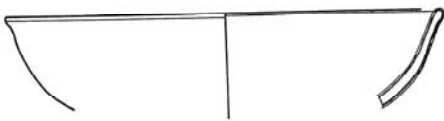
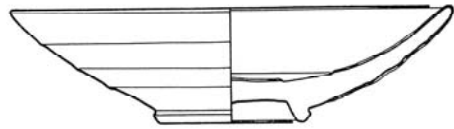
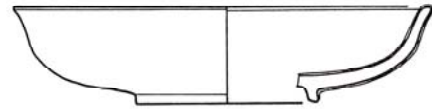
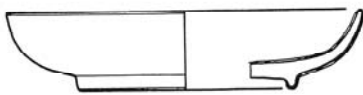
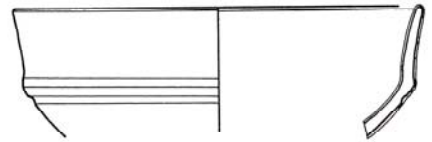
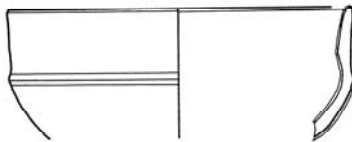
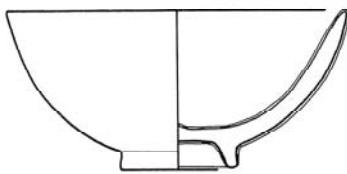
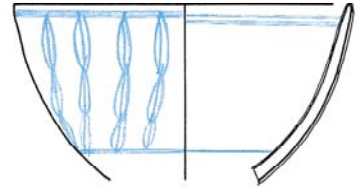
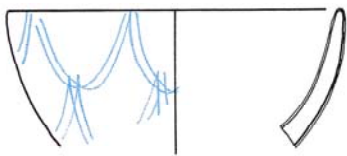
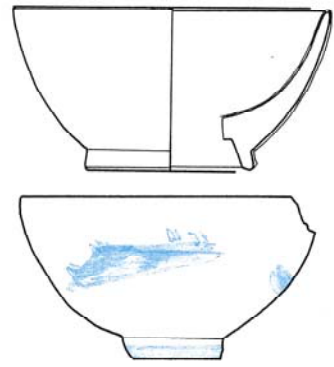
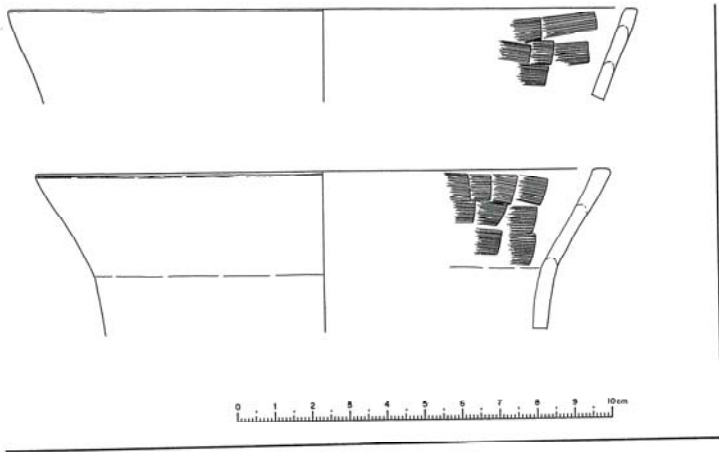
柱穴から出土したものである。直径12～21cm、長さ23～55cm、を呈するものである。柱根の下部は垂平に削っているものが多いが、52のT Y177と53のT Y529の先端は削りを施している。これらの柱根はすべて、建物跡として構成されたものには含まれていない。

3) 昆虫遺体

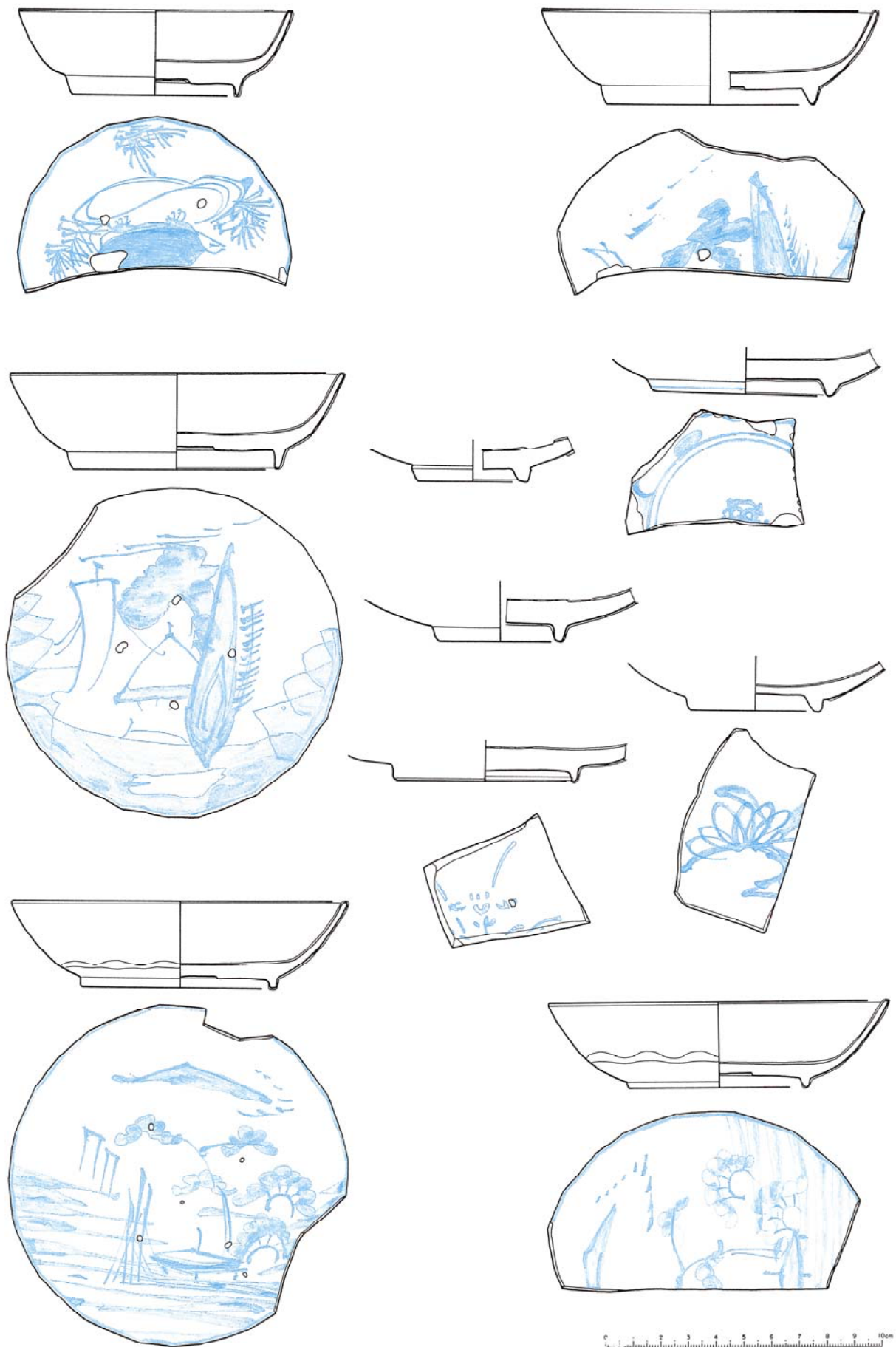
今回の調査で発見された昆虫遺体は、K Y12堀跡からの検出である。詳細については、草刈氏に特別寄稿として後述しているので参照されたい。



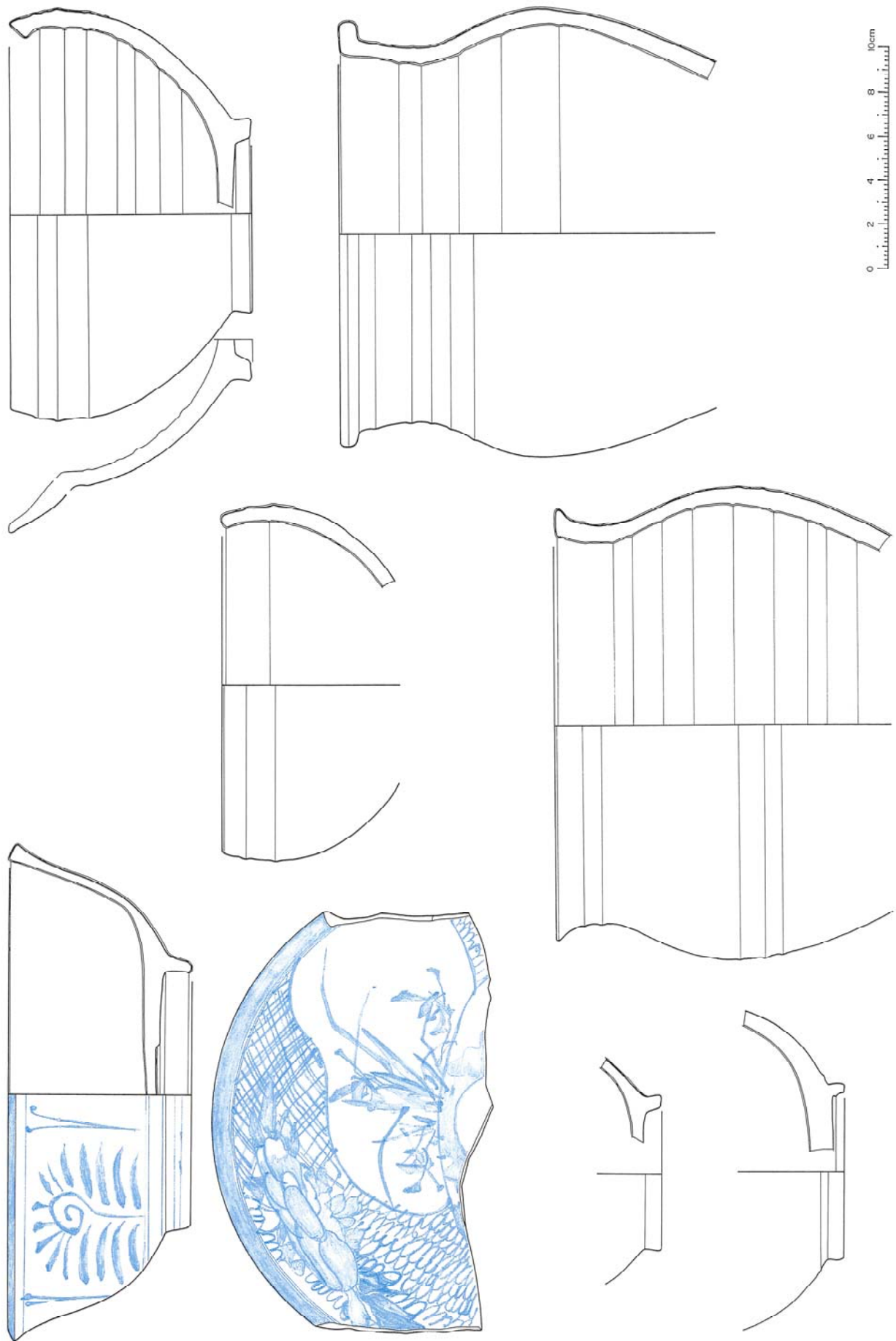
第14图 我妻館跡出土土鍋実測图(1)



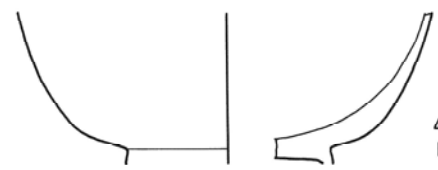
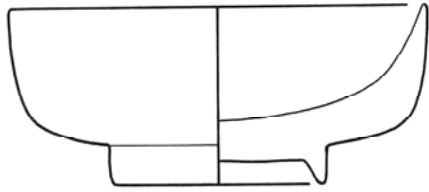
第15図 我妻館跡出土土鍋・陶磁器実測図(2)



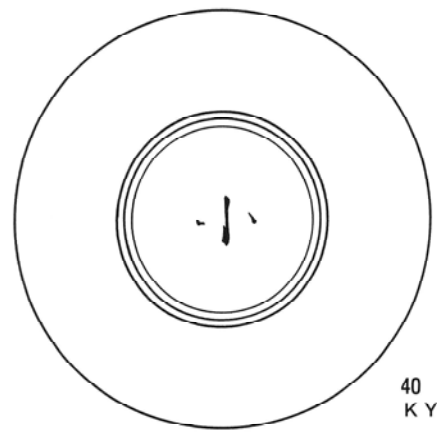
第16図 我妻館跡出土遺物実測図(3)



第17図 我妻館跡出土遺物実測図(4)



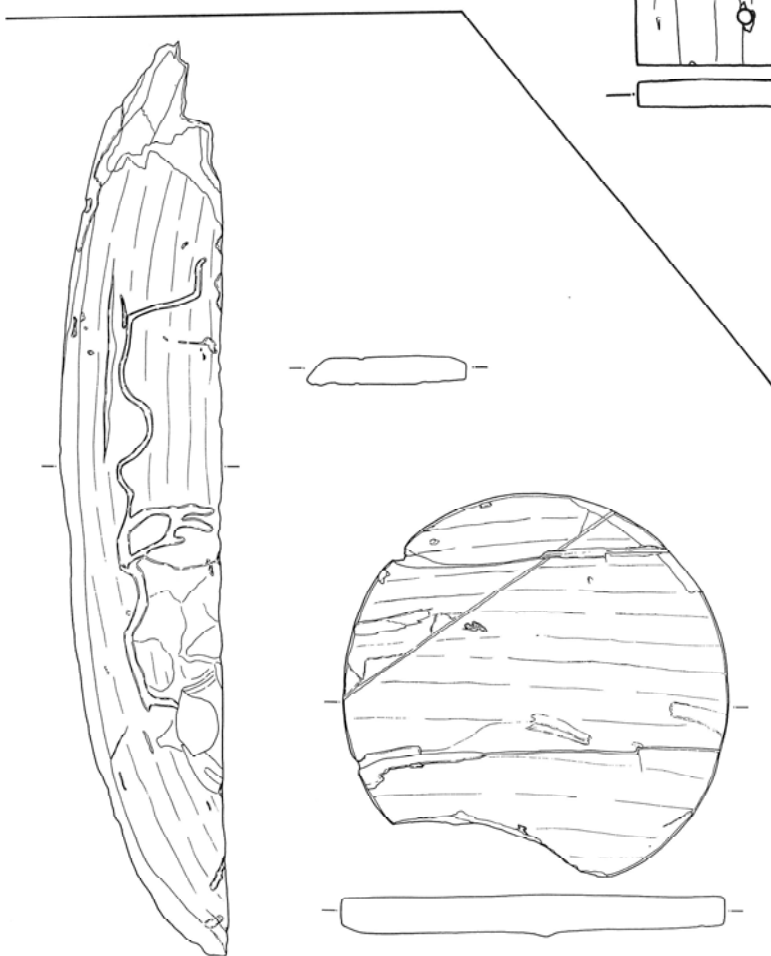
41
KY12



40
KY12

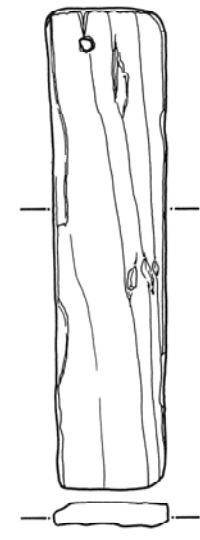


42
KY12

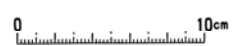


44
KY12

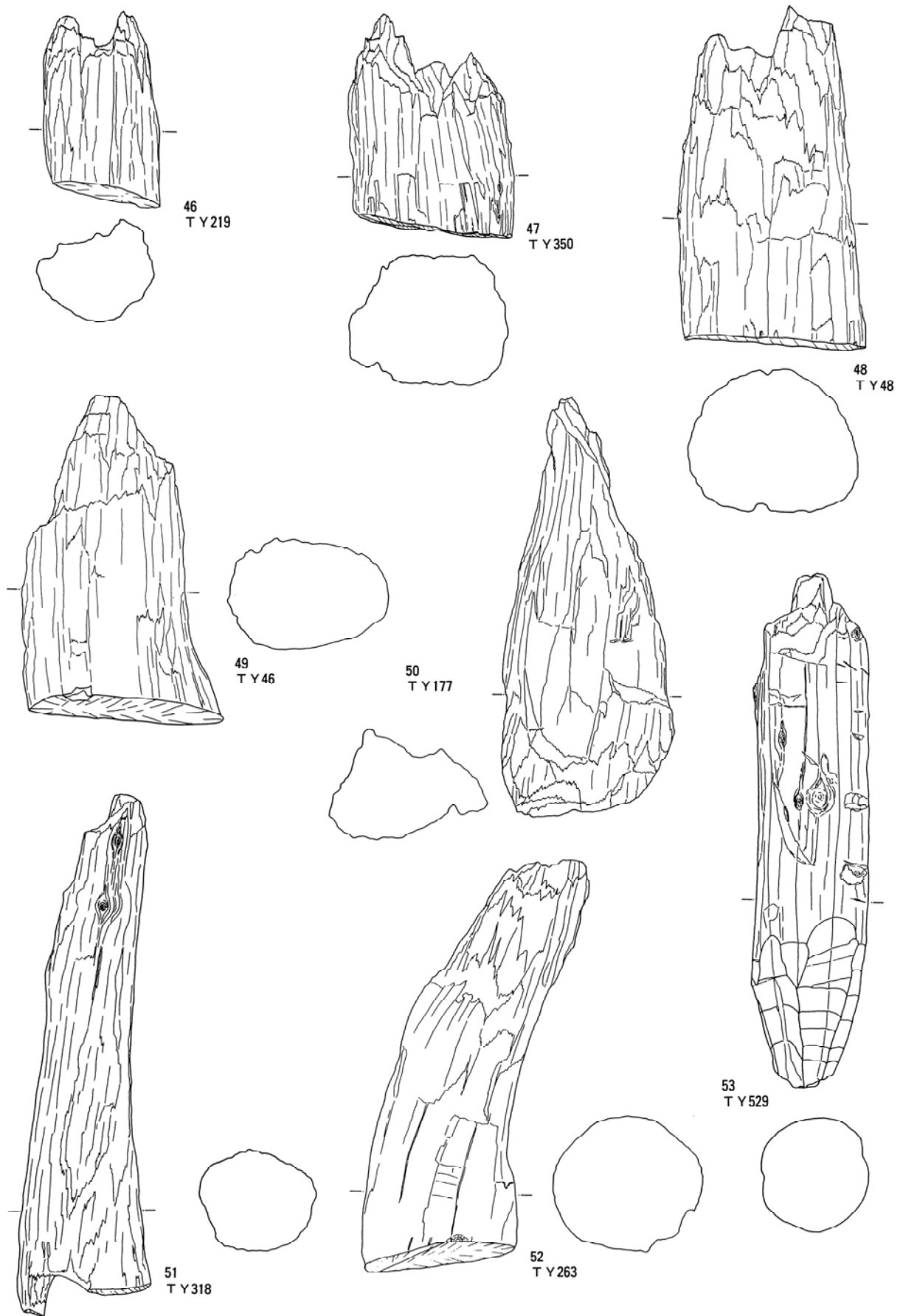
45
KY12



43
KY12



第18図 我妻館跡出土木製品実測図(5)



第19図 我妻館跡出土柱根実測図(6)

V 総 括

我妻館跡は、立地及び形態から地方豪族の居館ないし、地頭クラスの平城と考えられる。館が存在する万世町堂森周辺は、長井庄や屋代庄の境界付近に位置し、政治的に微妙な関係であったものと推測される。

今回の我妻館の調査は、所謂「平地」式の平城として、初の本格的な発掘調査であり、平城の成立から定着する段階の極めて重要な館跡であることが判明した。ここでは、調査によって明確となった成果を遺構と遺物、周辺遺跡の係りに歴史的な背景を加えて考察するものである。

1) 我妻館跡の遺構

我妻館は、土塁と水堀で構築した複郭式の平城で、中央の主郭に左右に配置された副郭で構成されている。宅地や水田、道路によって、形態の約半分程度が失われているが、現存する遺構と調査で確認した堀の状況から、東西約115m、南北86mの二重構造を有するもので、ほぼ一町四方を基本にしたものと考えられる。

ここで注目されるのが堀Bの存在である。堀Bは、東中央に虎口が開く南北71m、東西78mのほぼ方形プランを示し、その外郭に土塁を挟んで堀Aで二重構造を構成するが、東側に関しては堀Aが単独で存在することとなる。このことは、初期の我妻館が単郭式の館跡であった可能性が高く、後世になって、これまでの単郭部分の西側の約3分の1に南北に堀Cで区画し、さらに堀Aを東側に副郭部分の空間を配置する形で新たに堀を築き、複郭の平城に修復したものと推測される。

さて、建物跡であるが、主郭部分の中心にした範囲に数多くの柱穴が認められている。柱は掘立建物を主体とするもので、大半が建替えを有するものも多く、ホップ等の耕作で破壊されたものも少なくない。

今回の調査で確認されたものは、東側の副郭部分に3棟と主郭部分に4棟の7棟であった。建物は、BY5以外は概ね真北方向を示すのが特徴で、BY7、BY3、BY4の建物から想定すれば、最低でも3期以上の建物群が存在したものと推測される。母屋等の主要建物は確認できなかったが、副郭は3間×2間の南北長の建物に対し、主郭の建物は2間～3間×3間～4間と全体的に建物の規模が大きい特質がある。

特別寄稿

我妻館跡から出土した昆虫遺体

草刈 広一

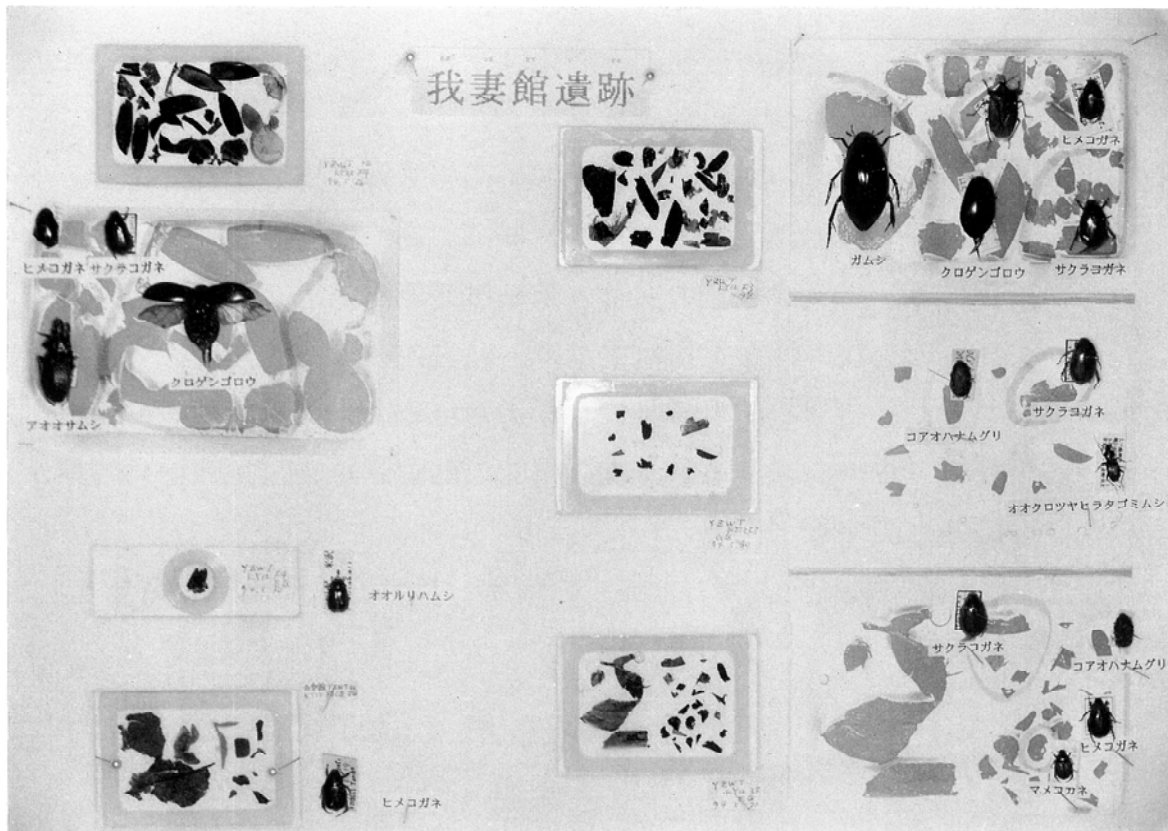
発掘作業中に堀跡から出土した昆虫遺体について、大浦C遺跡同様、筆者に同定依頼があったので、以下に報告する。

同定できた昆虫遺体のリストは表1のとおりである。微小な破片を除き、ほぼすべて同定できた。サクラコガネやヒメコガネが属するスジコガネ属は、似た種類が多く、前は種までの同定は困難だった。しかし上杉博物館所蔵のコガネムシ科甲虫が整理され、その現生種の標本と詳細に比較することで、種までの同定が可能となった。

米沢市の上浅川遺跡、大浦C遺跡、我妻館跡の3つの遺跡すべてから出土したものとして、上記スジコガネ属以外にマメコガネ、ツノアオカメムシが共通である。ツノアオカメムシの存在は、堀の周辺、土塁上などに広葉樹の林が存在していたことが想像される。ツノアオカメムシと同じく食植性昆虫（植生依存型昆虫）であるコガネムシ科の甲虫は、4種とも現在の「害虫」とされている。しかし4種とも畑作、果樹、林業の分野に影響を及ぼす種なので、具体的にどのような作物を栽培していたかなどの特定は困難である。ハムシ科のオオルリハムシも現在はエゴマの害虫とされることもあるが、県内では湿地のクルマバナやシロネに依存すると推定される非常に稀な種である。このため湧き水を伴った当時の堀傍に湿性植物が生えていて、それに依存していたことも考えられる。当地でのエゴマ栽培地での本種の調査が必要である。なお本種は日本から出土・記憶された昆虫遺体290種に含まれておらず、初記録である。

今回は地表性歩行虫のうちオサムシ科が3種得られているものの、大浦C遺跡で出現したエンマムシなどの食糞甲虫が発見されていない。都市型昆虫の代表である食糞甲虫は人為度のバロメーターともなっている。一方、水生昆虫であるゲンゴロウ科やガムシ科が多いことは豊かな自然度のバロメーターであるが、今回クロゲンゴロウが出土したことが特筆される。本種は県内では分布記録が少なく、置賜地方でも米沢市関地区の1971年までの標本が上杉博物館に保管されているのみで、現在確実に生息しているかどうか不明である。鎌倉、室町各層から3個体分出土した溝跡では、少ない水量ながら現在でも湧水がしみ出している。本種の安定した生息には単に池沼というだけでなく豊富な湧水が必要なことが示唆される。金沢至氏（大阪市立自然史博物館）が提案している、昆虫遺体の生息環境と食性の2つのファクターから数値化する「人為度スコア」を3遺跡について計算してみると、我妻館は山地が接している上浅川遺跡よりは人為度が高いものの、大浦C遺跡よりは自然度が高い値となった。

我妻館跡 出土昆虫リスト	YZWT KY12 区	室町	鎌倉				
		F 3	F 4				
		A	C	E	F	G	
甲虫目							
オサムシ科 Carabidae							
アオオサムシ	<i>Carabus insulicola</i>				2		
オオクロツヤヒラタゴミムシ	<i>Synuchus nitidus</i>					1	
アオゴミムシ	<i>Chlaenius pallipes</i>				1		
ゲンゴロウ科 Dytiscidae							
クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i>	1			2		
ガムシ科 Hydrophilidae							
ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i>	1					
コガネムシ科 Scarabaeidae							
サクラコガネ	<i>Anomala daimiana</i>	3		1	1	1	
ヒメコガネ	<i>A. rufocuprea</i>	1	2	1	1		
コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i>			1		1	
マメコガネ	<i>Popillia yaponica</i>			1			
ハムシ科 Chrysomelidae							
オオルリハムシ	<i>Chrysolina virgata</i>				1		
カメムシ目							
カメムシ科 Pentatomidae							
ツノアオカメムシ	<i>Pentatoma japomica</i>	1					



出土昆虫遺体（シリコン封入標本）と対応する現生標本（下及び右の10種18頭、右上の種名ラベルのないものが唯一甲虫でないツノアオカメムシ）

2) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、堀の内部に堆積した覆土内からの検出であり、館が機能を失った以降に堀内部に廃棄された近世～現代にかけての陶磁器類が大半を占めている。館跡の年代を示すものは極めて少なく、土鍋と木製品、柱根の一部であった。ここでは、年代の決め手となる土鍋について考察してみたい。土鍋は、内部に3単位の取手を有する土鍋で、米沢市を中心に約20箇所の中世の遺跡から出土している。米沢市の土鍋の出現は、11世紀代の木和田館跡に既にみられる。木和田館の土鍋は、初期形態に属するものであり、口縁部が平縁を有する直下型の深鉢形を示し、取手は認められないのが特徴となる。

その後、12世紀～13世紀代になると古代からの特質を継承した浅鉢形の丸底鍋や器高が低く口縁部が外に強く「く」字状に外反した鉢型に変化し、14世紀段階に入ると内部に取手を有する内耳取手と変化するものと考えられ、この時期に相当するのが上浅川遺跡出土の土鍋である。

15世紀代は、土鍋がもっとも発達する時期であり、取手が太く発達し口縁部に隣接する形態として成立する。また、口唇部は平縁から斜平縁となり、断面形態が鳥の嘴状になるのも特徴である。この時期に相当するのが、大浦C遺跡出土の土鍋で、完形土器8個体分の土鍋が検出されている。

15世紀後半になると全体の形態には変化はないが、外反する器形はやや内反り気味に立上り、胴部が幾分膨らみを有するようになる。特に口唇部は、嘴状から平縁に近くなり、その代表が、米沢城東二の丸跡出土の土鍋である。

16世紀代に入っても土鍋は使用される。器高が高く口唇部が丸味を示すものが多い特徴がある。米沢城東二の丸跡と鷺城に類例が認められる。

さて、これらの土鍋の特徴を比較すれば、我妻館の5・6・8は大浦C遺跡出土の土鍋に近く、15世紀前半の年代が与えられる。一方、1～3・4・7は口唇部が平縁で、やや丸味を示し、直立気味の器形から15世紀後半の時期が与えられるものと推測する。

従って、我妻館の機能としては、15世紀前半～15世紀後半の年代が与えられ、概ね15世紀の範疇となる。

3) 我妻館の成立と年代

我妻館跡が所在する万世周辺には、梓川によって形成された扇状地の末端部に当り、縄文時代から中世にかけて数多くの遺跡が分布する米沢最大の遺跡の

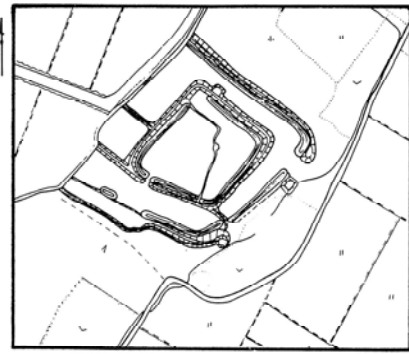
宝庫である。中世の遺跡に関しても例外ではなく、県内では最古級の木和田館跡を始め、山城、平城等の貴重な中世遺跡が存在している。ここでは、平城の出現から我妻館の成立までを万世周辺の遺跡を中心に考察してみたい。当地方で最も早く城が出現したのは、戸塚山古墳群に程近い、木和田地区である。木和田地区は、西側に位置する梓川を自然の要害とし、三方を出羽丘陵から延びた尾根が円弧状に張出し、小規模な低湿地の盆地状になっている。館跡は、丘陵の山麓に沿って分布し、南に存在する木和田館の他に東側に馬ノ越道館、北に木和田東屋敷館、同じく月ノ原館の4箇所の館跡が集中している。特に木和田館跡は、土塁と水堀で台形状に配した半町四方の山寄式の平城で、発掘調査で検出された珠洲系陶器と須恵器の共存を重視し、11世紀～12世紀前半頃の館跡であることが判明している。筆者は、東南置賜の館跡を分類し、平城を12世紀から16世紀までの9段階に分類した。第1段階は木和田館であり、12世紀前半とした。

第2段階としては、平行四辺形の横長の方形館跡を特徴としたもので、大字木和田の木和田東屋敷館と月ノ原館がこれにあたる。年代は、概ね13世紀代に位置付けている。

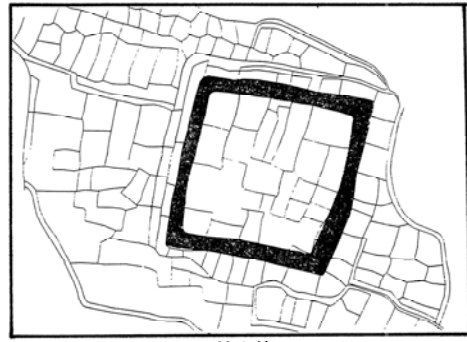
第3段階としては、半町規模に土塁や堀を「L」字状に配した大字森合の飯塚館、大字木和田の馬ノ越道館、それにやや時代が下がるが一町四方に「L」字状を配した大規模な広幡町成島の成島館が出現する。前者は13世紀末から14前半、後者は14世紀前半から中頃に位置付けられる。

第4段階になると縦方向に「L」字状に土塁と水堀を有する万世町梓山の稲荷山館が構築される。ここまでの4段階が、山寄式の形態を呈しているが、この段階で小規模な山城も出現するようになる。僅かな主郭と帯曲輪を配した程度の粗末なものであり、万世の館山館跡がこれにあたる。同じ第4段階でも14世紀後半頃から15世紀の前半頃に入ると平地に一町四方の方形館跡が出現する。万世町梓山の梓山館、大字関根の北館がこれに相当する。これら一町四方の方形館跡は、関東武士団が東北地方に侵入し、武力で在地農民や在地豪族を統合した際の拠点とみる向きもあるが、定かではない。

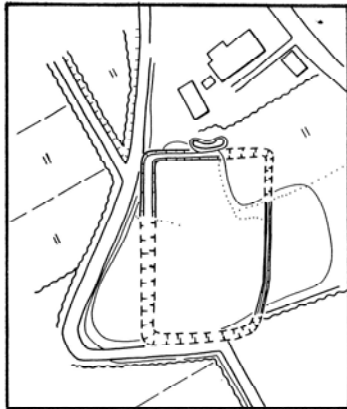
第5段階は方形館跡が副郭を有するようになり、主郭を十字状に区画した大字上新田の中川原館がその代表で、これまでの山寄式の小規模な方形館跡も平地に降りてくるようになる。広幡町成島の三月在家館、大字川井の東屋敷館がその代表となり、在家を有する地名が残るものも特徴で、在家集落に関連する



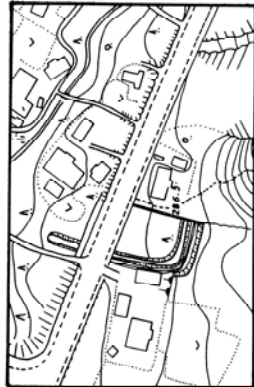
原田館



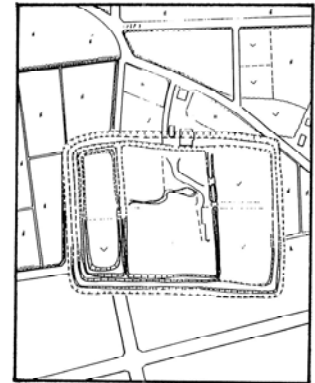
梓山館



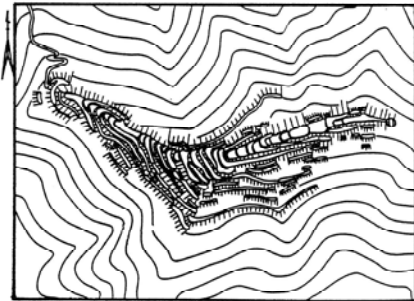
金谷館



稲荷山館



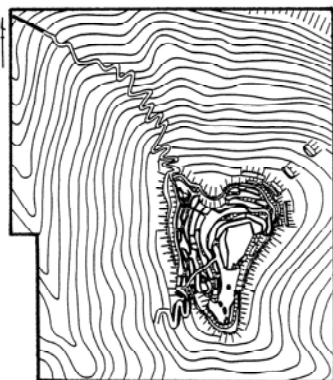
我妻館



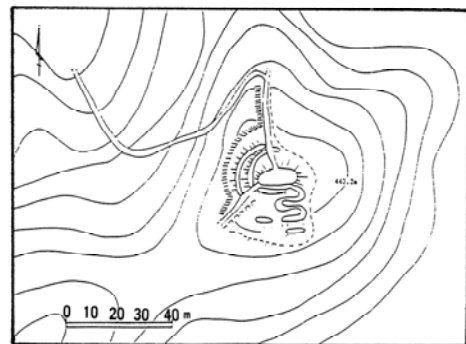
早坂山館



堂森山館 0 20m



羽山館



万世館山 0 10 20 30 40m

第20図 我妻館跡周辺の中世城館跡縄張図

館跡として注目される。年代的には15世紀前半代に位置付けられる。

第6段階に入ると副郭の構造が機能を前提とした形として成立し、主郭と副郭が明瞭になるものと考えられる。この代表が我妻館であり、中央の主郭に左右に配置された副郭はそれを物語っている。また、我妻館跡は、第6段階の平城の仲間でも、主郭の左右に副郭を配置するなど特異な形状を示すことも注目され、このことから大胆に推測すれば、近世様式が出現する直前の形態の可能性も指摘される。一方、この頃には半町四方の単郭式の正方形の小規模な屋敷と呼ばれる館跡も出現する。出土した土鍋などから15世紀後半が妥当であろう。

第7段階には第6段階の平城も共存しながら、新に河川を自然防御施設とした平城が出現する。南陽市の蒲生田館などであり、16世紀前半と推測される。

第8段階のに入ると主郭を中心に置き、周りに副郭を配した形態の平城が出現し、万世町牛森の原田館にみられる本丸と外側に二の丸を配した所謂近世の特徴的な城形態に発展するものと予想され、16世紀中頃の年代が与えられる。

第9段階は、16世紀後半以降に発達した城形態で、これまでの継続した平城を拡張し、本丸、二の丸、三の丸跡が明確に表現され、典型的な主城として成立する。南陽市の宮沢城、川西町の大塚城、米沢城がそれにあたる。

参考として下記に編年表を付け加えたので、参照願いたい。

第1表 平城編年表

(1995 手塚)

形式	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階	8段階	9段階
年代	11世紀後半 ~12世紀	13世紀	14世紀前半	14世紀後半	15世紀前半	15世紀後半	16世紀前半	16世紀中葉	16世紀後半
主な平城	木和田館	月ノ原館 木和田東 屋敷館	成島館 馬ノ越道館 飯塚館	梓山館 北館 稲荷山館	中川原館 三月在家館 東屋敷館 金谷館	我妻館	蒲生田館	原田館	米沢城跡

4) 我妻館の歴史的な背景

我妻館跡が存在する周辺の万世地区には中世に属する遺跡が数多く分布している。特に城跡に関しては、原田館、梓山館、金谷館、稲荷山館と我妻館の5箇所平城と早坂山館、堂森山館、万世館山館、羽山館の4箇所の山城が点在している。さらに、中世の遺跡として、庶民信仰の対象となった八幡原土壇や

沼田土壇、堂森山塚、焼山墳墓、比丘尼平廃寺跡、柿の木遺跡などがあり、米沢市内でも貴重な中世遺跡群が集中する地区として注目されている。

この中で、注目されるのは堂森山周辺に存在する寺院及び関連遺跡と堂森山館の存在で、我妻館の成立に重要な意味をもつものと見られる。ことに堂森山南山麓に所在する真言宗の寺院の堂森善光寺は、建久3年（1192）に益王姫によって中興したとされる。弘安2年（1279）には長井氏三代の時秀が屋代庄夏刈に資福寺を建立、さらに屋代庄堂森に新善光寺を建立した。従って善光寺は、少なくとも12世紀代には建立していたものと推測される。

最初に善光寺を中興したとされる益王姫は、永暦元年（1160）主君源義朝を暗殺した長田庄次忠次の妹であり、戦火を逃れて善光寺にたどりついたが、女性の身で寺にいることもかなわず、山の中腹に庵を結んで居住した。この庵を比丘尼平と称し、現在もその痕跡を留めている。

次に長井時秀が新善光寺を建立するのが現在の善光寺（二度の火災に遭っている）にあたり、県の重要文化財である見返阿弥陀仏と長井時広夫婦の座象一組が安置されている。旧善光寺は、現在よりも約150m程東側に位置していたと想定され、直上の山陵には修法壇と推測される方形の塚群、中世から近世にかけての板碑群と堂森館跡が残っている。また、西山腹の平坦面には、前述した尼寺と称される比丘尼平廃寺と山麓から水田地帯には縄文時代～中世の大規模な比丘尼平遺跡が存在している。これらの遺跡周辺には、鍛冶田、奈良原、桜壇、御月見山などと伝えられている地域があり、かつて益王姫が故郷を偲んで奈良八景にちなんで命名したものと伝えられている。

さらに、善光寺に関する記録としては、正平12年（1357）に置賜郡長井庄河井郷内堂森善光寺の住僧本聖仁光が、多くの僧を集めて、大般若経を写した記録があり、その一部が山寺の立石寺に残されている。以下

・「大般若波羅密多経卷二百四十七奥書」

出羽国長井庄堂森善光寺常住本聖仁光 常陸国久慈西郡上岩瀬新福寺住侶
筆者金剛佛子宗俊

延文二年（1357）丁酉十一月二十七日五百二十五奥書

羽州置賜郡屋代庄河井郷内堂森新善光寺常経也、

右筆同郡内成島荘古志田郷光明寺住書之（立石寺現存）

このように堂森善光寺で写経した経文が残っており、遠く常陸の国の僧や古志田の僧などを集めて書写したものであり、当時の善光寺の隆盛が窺われるも

のである。

この中での記録で注目されるのは、新善光寺と屋代・長井の両庄の扱いである。先の善光寺に関しては、古志田郷光明寺の住職が、堂森新善光寺とあえて「新」を付け加えて記載している点であり、既に述べているように益王姫が中興した所謂「旧善光寺」と長井時秀が建立した所謂「新善光寺」とを明らかに区別することを意味し、写経を挙行した善光寺が長井時秀の建立寺院に符号するものと考えられる。

一方、後の庄に関しては、善光寺の所在する地域区分として、屋代庄と長井庄の両庄を使い分けしている。この矛盾は、かつて屋代庄と長井庄の領地が堂森善光寺付近で、微妙に変化していたことを示すものである。基本的には長井庄に定着することは、後の記録で証明できるが、当時の境界線の設定が何らかの原因で、不明瞭であったことが重複しての表現となったともいえる。

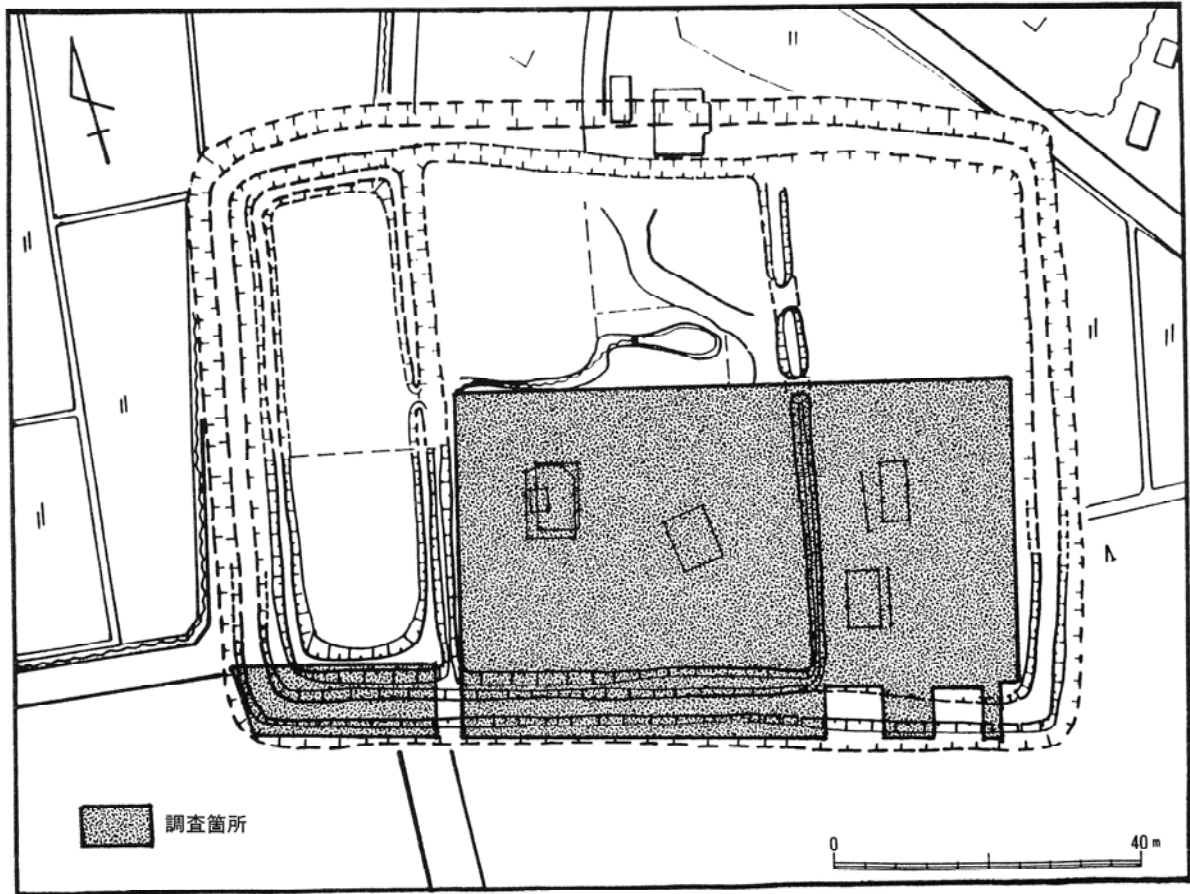
こうした背景が、長井時代の領地境界をめぐる拠点としての城館跡の存在と重要性を確立させ、万世地区の稲荷山館や上郷地区の安部館、飯塚館の出現となった。この段階が先の第3段階～第4段階である。

第5段階に入ると伊達氏の影響が濃厚となり、軍事的な防御施設を配備した早坂山館や堂森山館、羽山館等が山城として次々と築城されるようになる。

堂森山館は、堂森山の東端に立地するもので、善光寺を守護するかのよう山頂には小規模なテラスを直線状に配し、緩やかな南斜面を利用して帯曲輪を階段状に多様している。山麓には根小屋が付随し、善光寺に接続していたものと予想される。この種の山城は、15世紀前半の早坂山型に分類され、我妻館が構築される直前に位置するものであり、主郭となる曲輪が長形状を呈する特徴から推測すれば、我妻館が成立した後に修復を施して、山城として機能していたものと考えられる。平城もまた、重要地域の拠点としての性格が顕著となる。一町四方に土塁、水堀を配備した金谷館、梓山館はこうした山城を背景に確立したものとみられる。

そして、第6段階の我妻館からは、伊達支配地域の要として、在地豪族を各地に配置しながら、軍事的な館跡機能として配備して行くものとみられる。

こうしてみると、長井時代に出羽善光寺を中心に発展した中世文化は、荘園制度が弱体化する一方で、領地拡大をもくろむ関東武士団の進出に加え、在家農民の一部にも私有制度の確立とともに、身分的な上下関係が生まれ、小単位の有力農民として成立していったものとみられる。



第21図 我妻館跡建物配置図

在家衆の私有化の確立を契機に、有力農民の一部には、新たな在地豪族として優位性を主張するものも現われ、一方、長井氏の保護で旧在地豪族（国人領主を含む）として領土運営を委託されていた旧在地豪族も荘園制度が解体するとともに弱まり、優位関係に歪が生じていったものと予想される。新たな豪族の仲間となった有力農民らは、伊達氏に取り入る選択をすることで自らの所有権の維持や領地の拡大を図り、やがて伊達氏の支配制度に組み入れられていったとみられる。こうした、政治決断が伊達氏の侵入を容易に導き、長井氏の滅亡の要因となった。いわば、伊達氏の侵攻は、荘園制度の歪から出現した新たな在地豪族を加護し、旧在地豪族を排除する新旧交代の図式が成功した結果といえる。その中心となった有力農民の居館が梓山館、子孫に当る地方豪族の居館が我妻館跡や原田館跡と推測されなくもない。従って、我妻館は伊達氏による支配制度が発展する課程の段階に位置する重要な館跡といえる。

参考文献

- 米沢市埋蔵文化財調査報告書 第14・15集 上浅川遺跡
- 米沢市埋蔵文化財調査報告書 第33集 大浦C遺跡

報告書抄録

ふりがな	わがつまたてあとほくつちようさほうこくしょ							
書名	我妻館跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編集著者	月山隆弘							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	㊦992 米沢市金池三丁目1番55号							
発行月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わがつまたて 我妻館	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 ばんせいちよう 万世町 どうもりあざ 堂森字 のなか 野中	6202	5	37度 54分 23秒	140度 8分 30秒	19940418～ 19940715	3,000	宅地造成 に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
我妻館	城館跡	中世	掘立建物跡	内耳取手土鍋		副郭式の館跡		

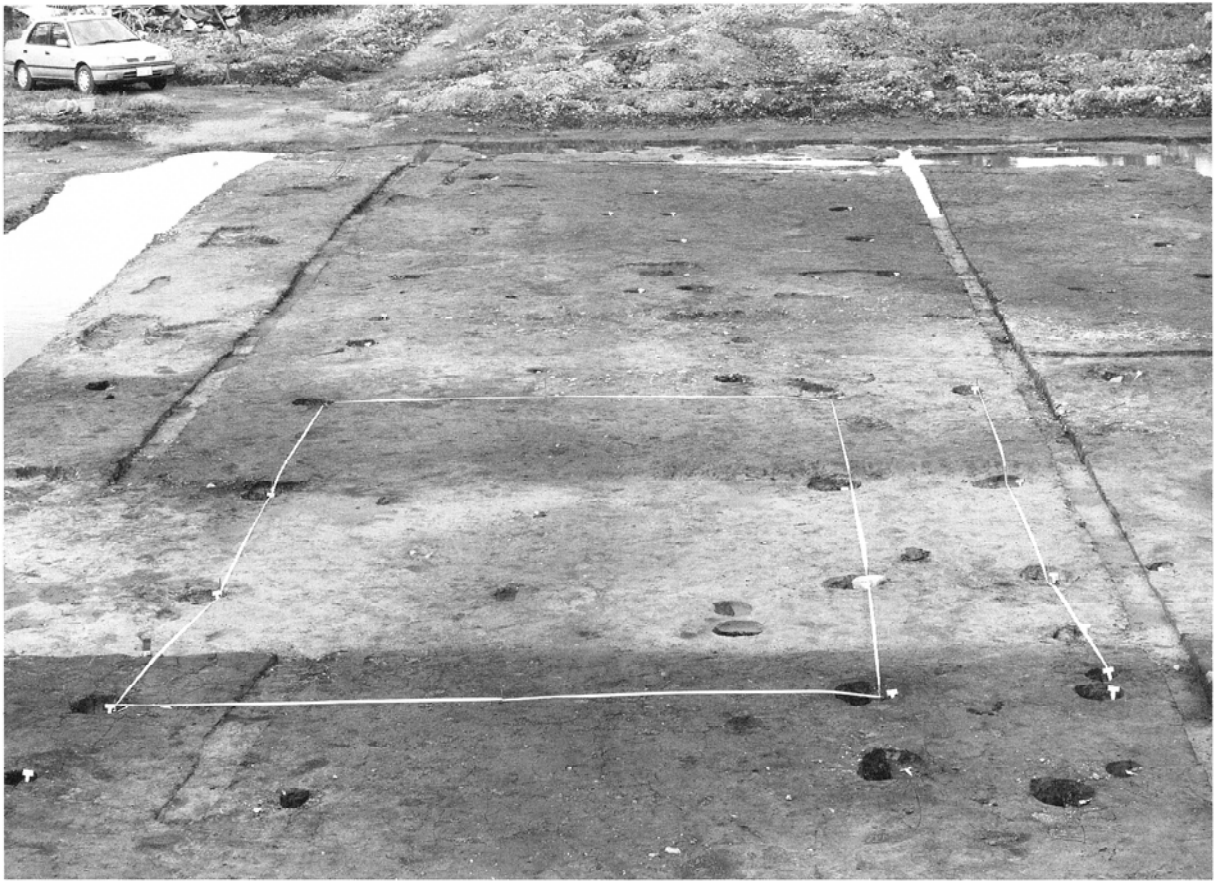
写 真 图 版



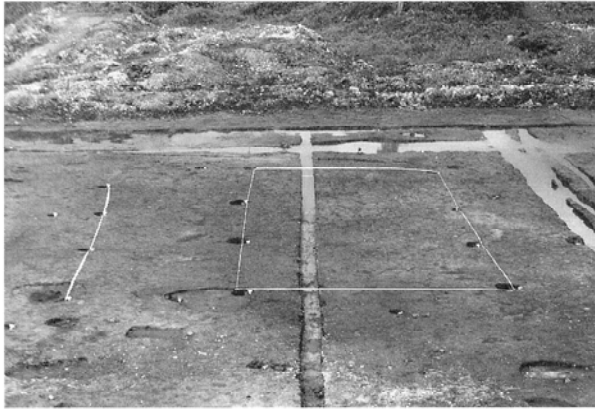
▲遺跡遠景（北西から）



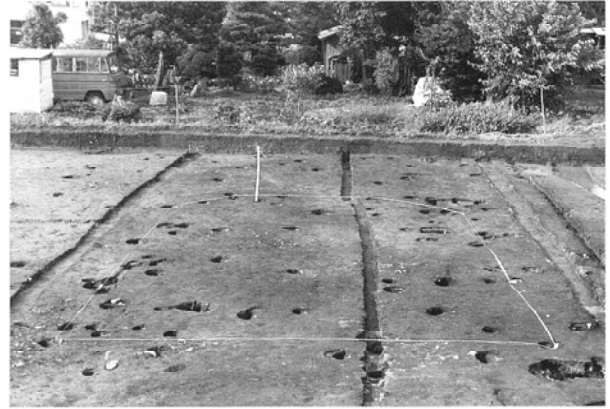
▲遺跡近景（南から）



▲BY 1 (南から)



▲BY 2 右・BY 6 左 (南から)



▲BY 3 (南から)



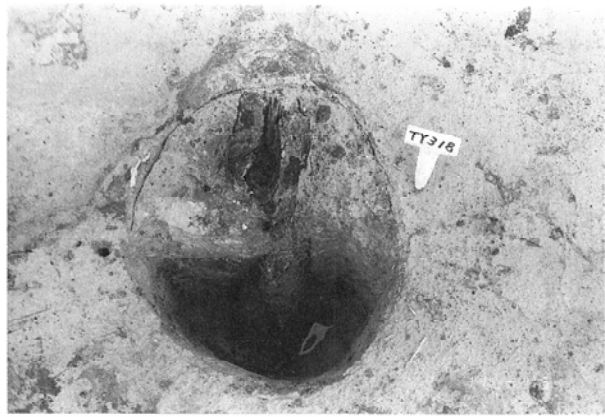
▲BY 4 (南から)



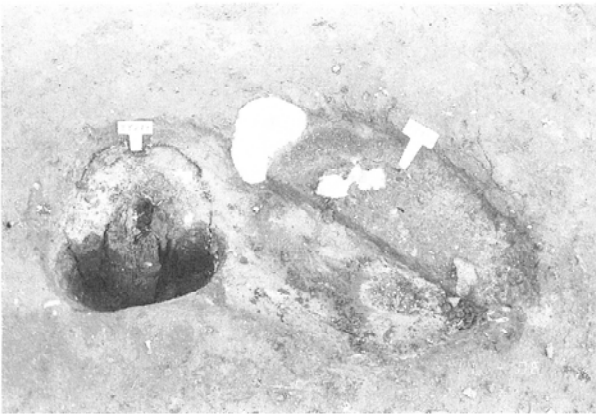
▲BY 7 (南から)



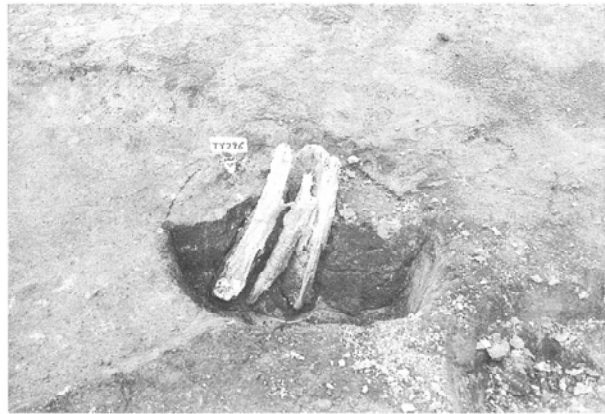
▲ TY 350



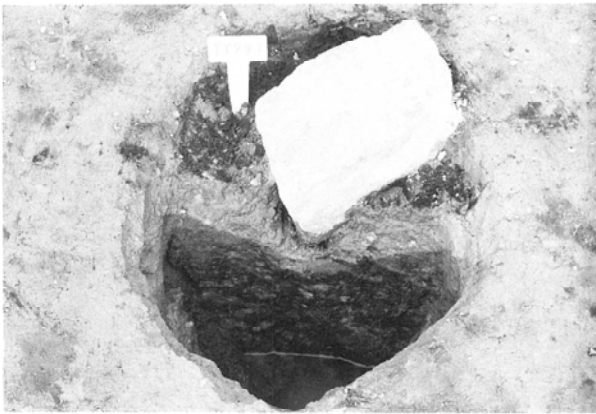
▲ TY 318



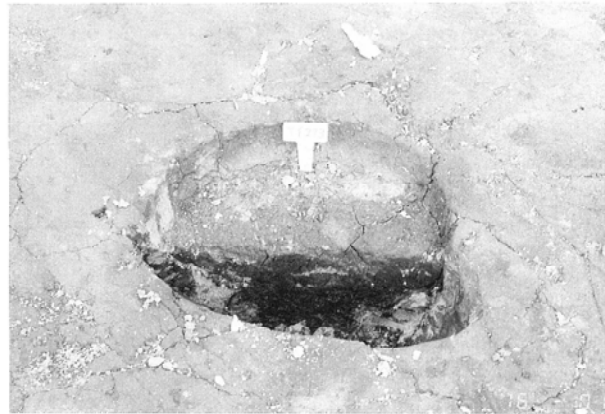
▲ TY 219(左)・TY 354(右)



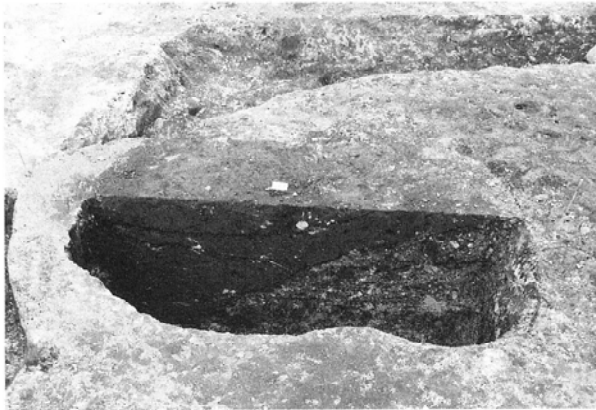
▲ TY 296



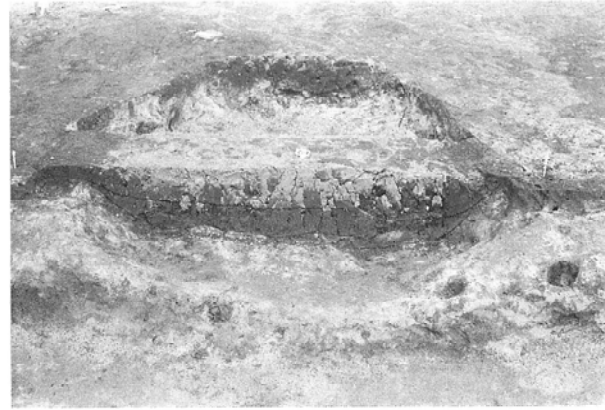
▲ TY 247



▲ TY 273



▲ DY 13井戸跡（東から）



▲ DY 14土壇（南から）



▲土塁全景（東から）



▲KY22堀跡土層断面（東から）



▲KY12堀跡南西コーナー部（西から）



▲同 上（東から）



▲左 同（東から）



▲KY12掘跡・竹管暗渠（北から）



▲同 上（南から）



▲ KY22堀跡 (東から)



▲ KY12堀跡 (東から)



▲ KY12障子堀跡



▲ KY11溝跡土層断面



▲ 土壘版築状況



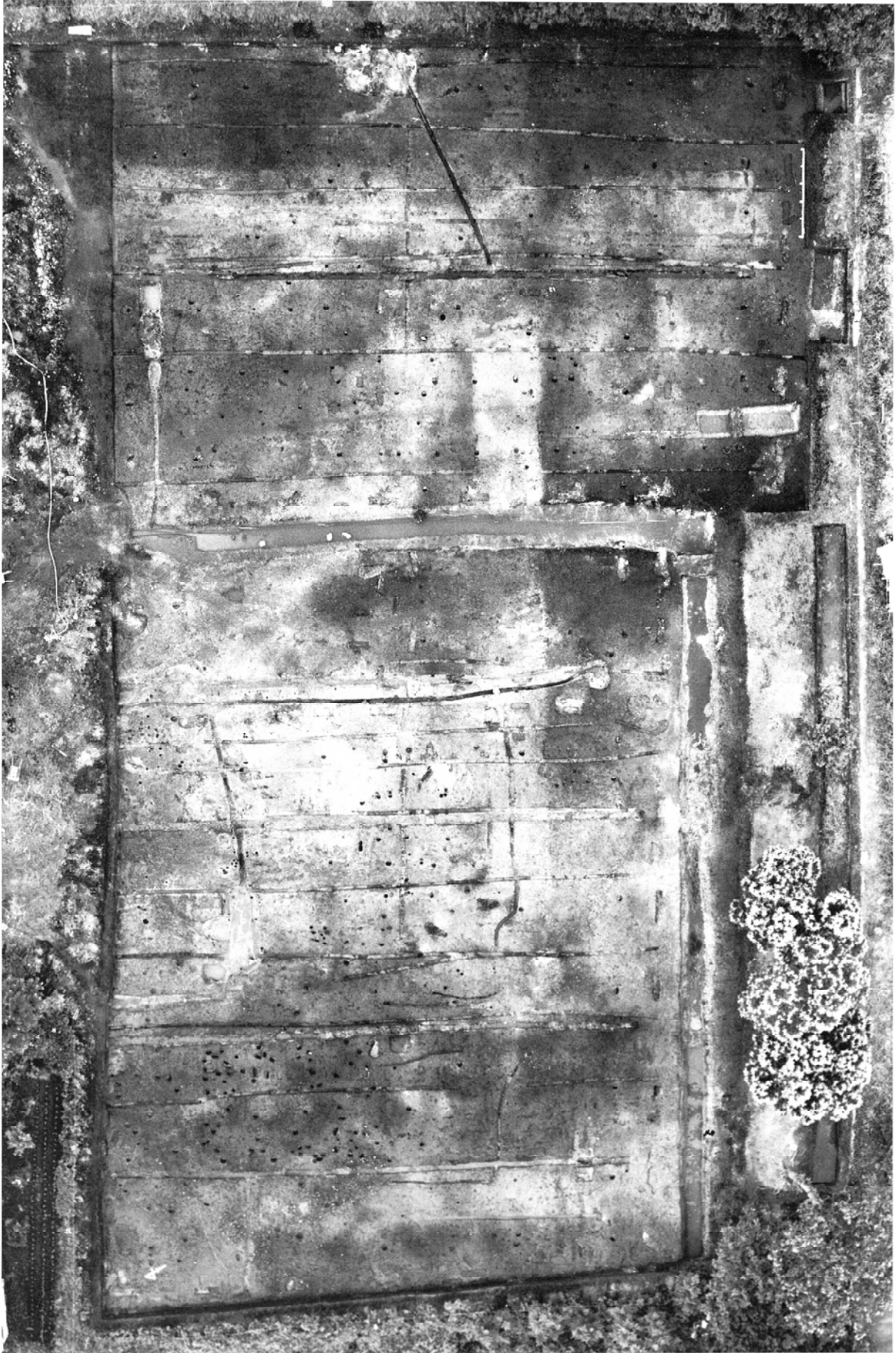
▲ 左 同



▲ 同 上

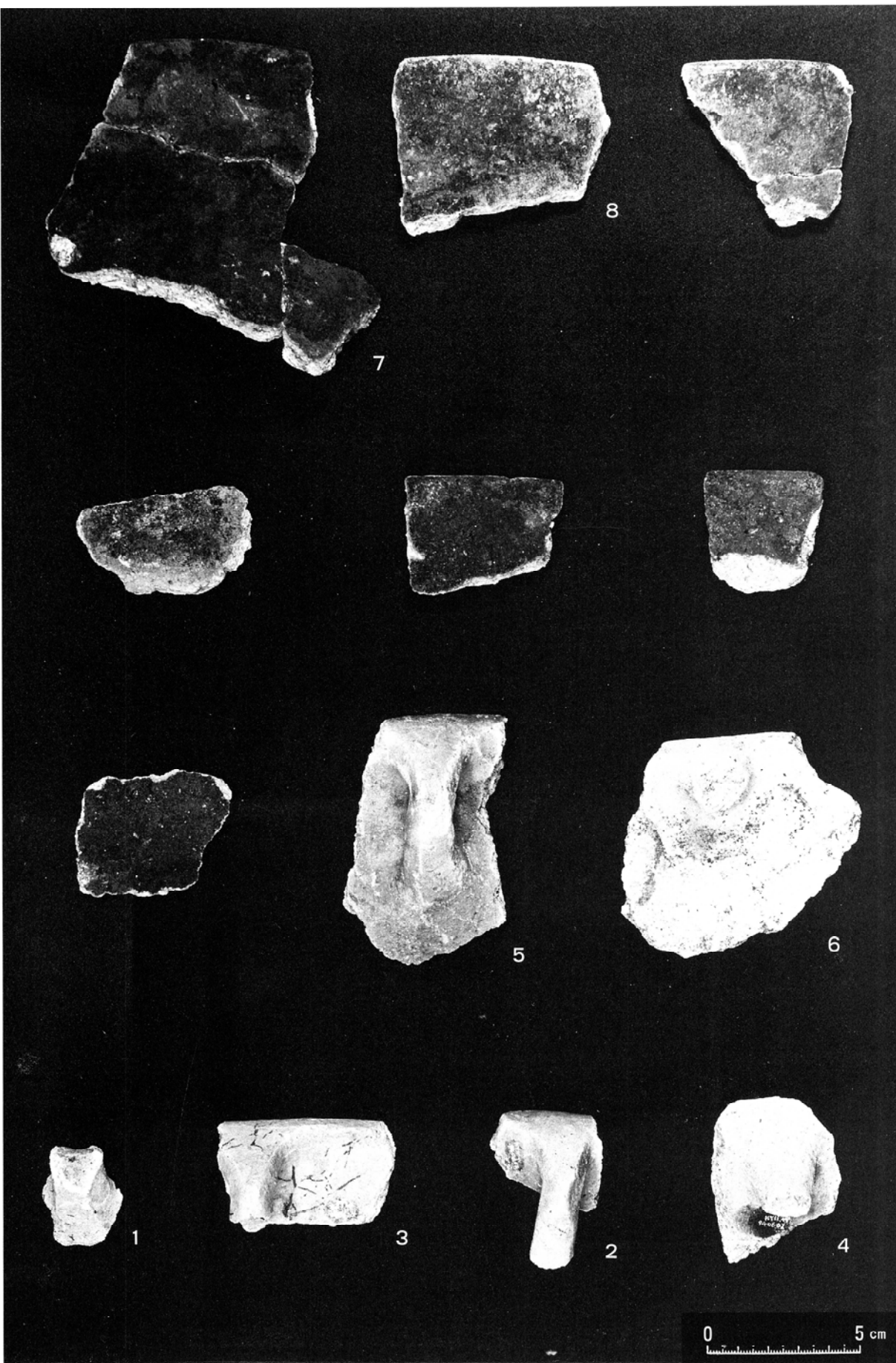


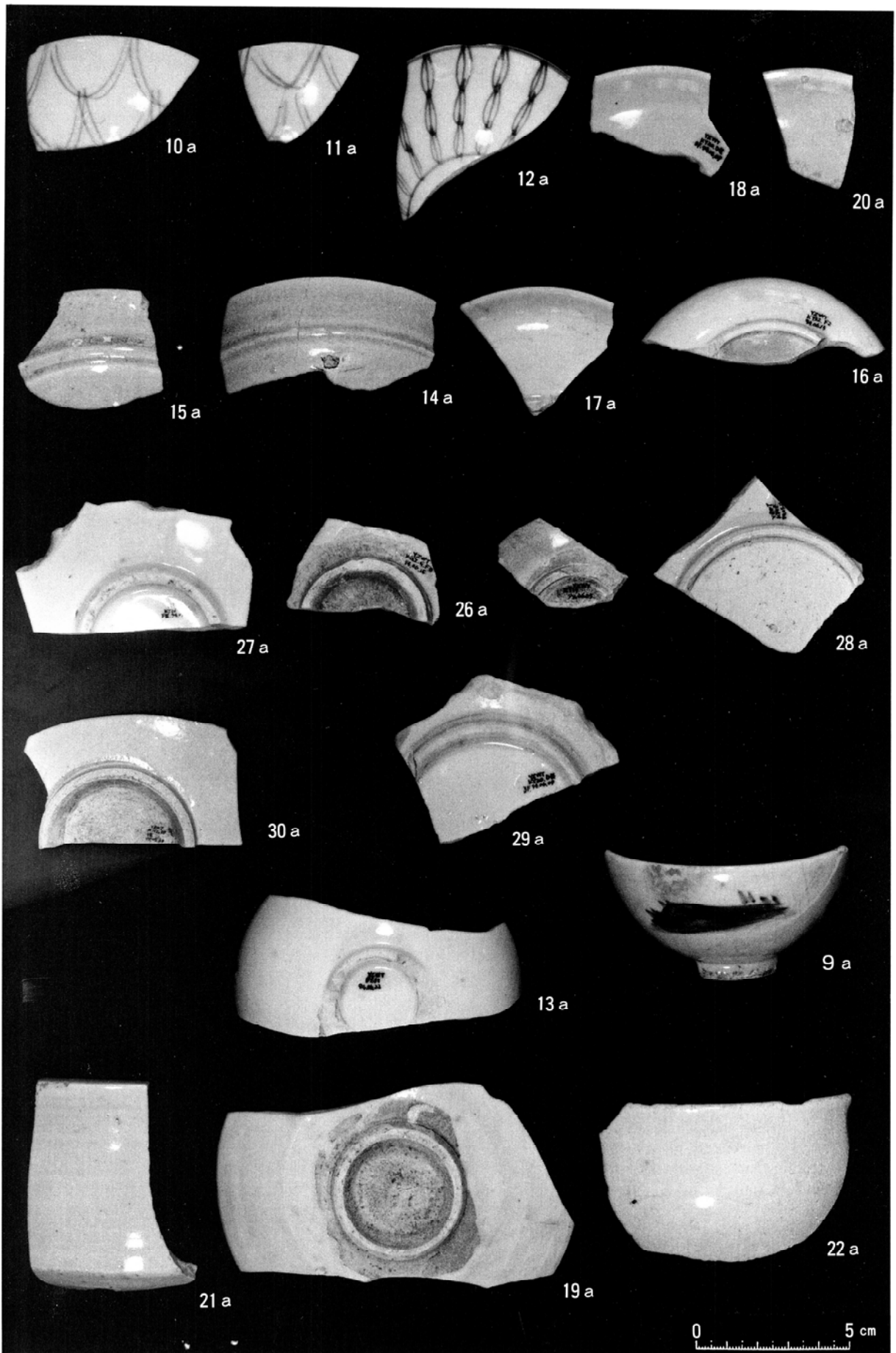
▲ 左上同

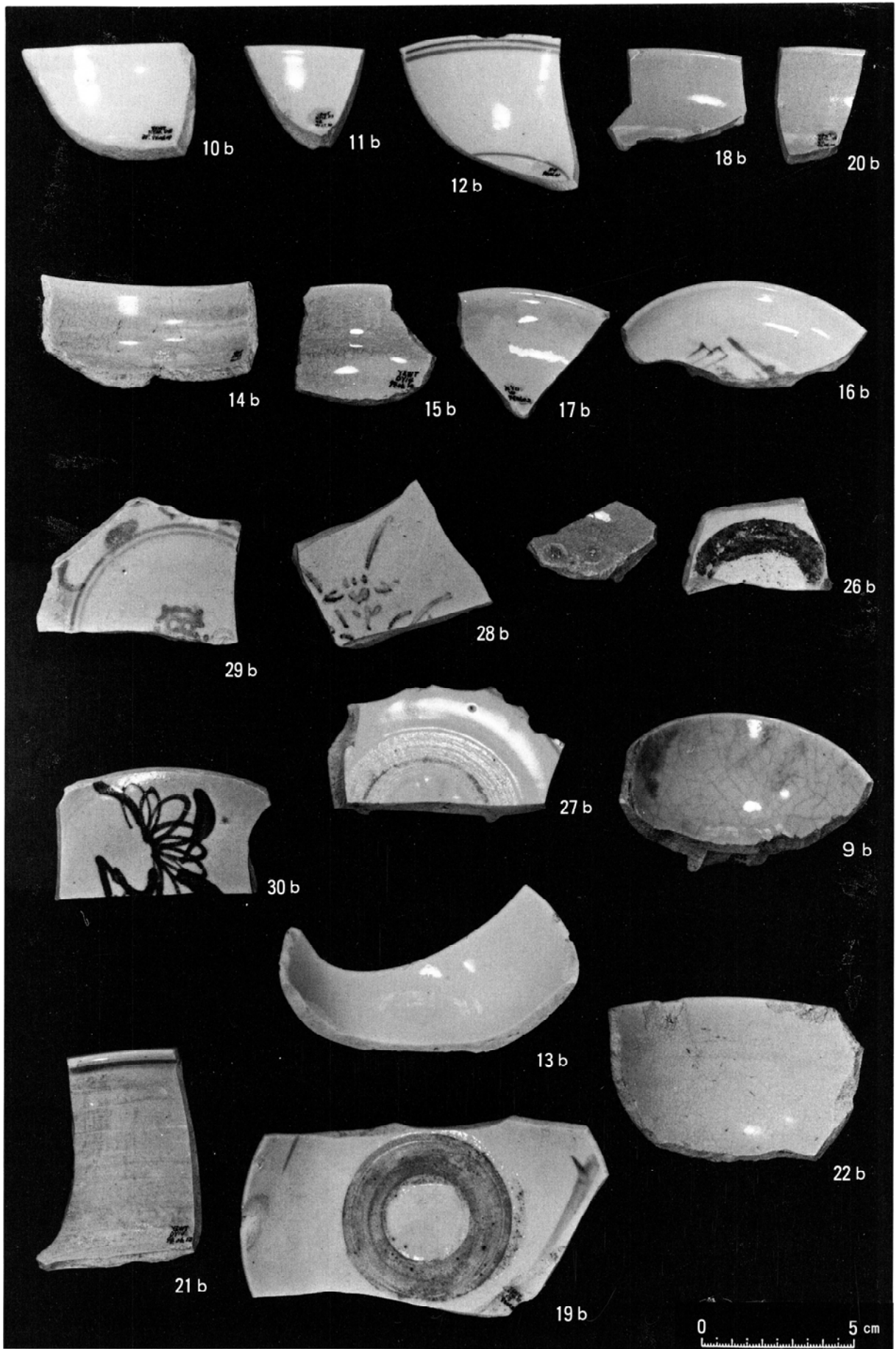


▲上空から「左北」

図版八 出土遺物(土鍋)

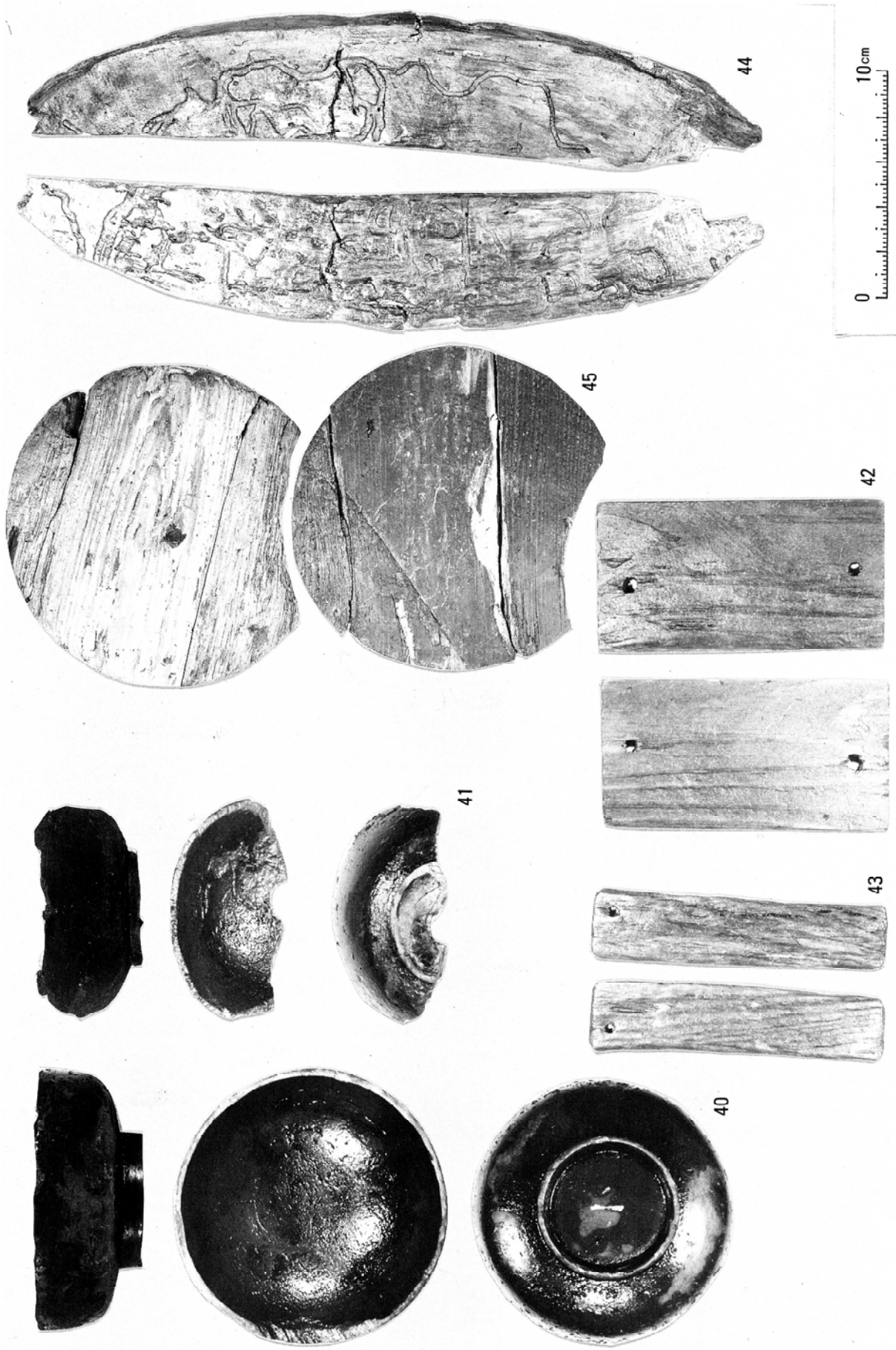












図版十三 出土遺物(木製品)

図版十四 出土遺物(柱根)



46



47



48



49



50



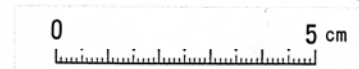
53



51



52



米沢市埋蔵文化財調査報告書50集

我 妻 館

我妻館跡発掘調査報告集

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月30日 発行

発行 米 沢 市 教 育 委 員 会
米 沢 市 金 池 三 丁 目 1 番 5 5 号
TEL (0238)22-5111(内線 7504)

印刷 (株) 川 島 印 刷
米 沢 市 大 字 花 沢 2 2 1 - 2
TEL (0238) 2 1 - 5 5 1 1

